# 地域創造コース基礎ゼミ報告（2021年度）
# 実践的教育で育まれる“地域学”―自然を糧にする営みに学ぶ

村田 周祐・池田 幹太・今井 駿太郎・佐崎 正宗・磯田 啓成・五嶋 諒士・
越宮 太一・井上 瑛太郎・淺原 唯貴・竹鼻 智耶・藤本 雪香

# Studies of Regional created through practical education: Learning from Activities Feeding on Nature

SHUSUKE Murata, KANTA Ikeda, SHUNTARO Imai, MASAMUNE Sazaki,
KEISEI Isoda, RYOJI Goto, TAICHI Koshimiya, EITARO Inoue,
TADATAKA Asahara, TOMOYA Takehana, YUKIKA Fujimoto

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第18巻　第3号　抜刷
REGIONAL STUDIES（TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES）Vol. 18 / No. 3
令和４年 3月25日発行　March 25, 2022

# 地域創造コース基礎ゼミ報告（2021 年度）

# 実践的教育で育まれる“地域学”—自然を糧にする営みに学ぶ

村田周祐*・池田幹太**・今井駿太郎**・佐崎正宗**・磯田啓成**・五嶋諒士**・
越宮太一**・井上瑛太郎**・淺原唯貴**・竹鼻智耶**・藤本雪香**

Studies of Regional created through practical education:
Learning from Activities Feeding on Nature

SHUSUKE Murata*, KANTA Ikeda **, SHUNTARO Imai **, MASAMUNE Sazaki **,
KEISEI Isoda **, RYOJI Goto **, TAICHI Koshimiya**, EITARO Inoue **,
TADATAKA Asahara **, TOMOYA Takehana **, YUKIKA Fujimoto **

キーワード：実践的教育，地域連携，農業，林業，漁業
Key Words: Practical Education, Regional Cooperation, Agriculture, Forestry, Fishery

## Ⅰ．本稿の意図と内容

本稿の目的は，実践的教育のなかで育まれる「地域学」を記録することにある。超学際としての「地域学」の側面，つまり座学のための座学でも，実践のための実践でもなく，両者を有機的に結びつけていく地域学の記録である。具体的には，2021（令和3)年度後期に地域学部地域学科地域創造コース１回生を対象とした「基礎ゼミ（村田)」の記録である。

近年の地域課題は総じて「オーバーユーズ」から「アンダーユース」へと移行している。例えば，第一産業をめぐる地域課題は「土地不足(担い手過多)」から「担い手不足（未利用過多)」へと移行し，「耕作放棄農地」「間伐遅れの林地」「放棄漁場」として顕在化している。しかし，こうした現象は統計データとして形式的に把握することはできたとしても，その「内実」に触れることは難しい。なぜなら，地域課題の具体的な現れ方は，各々の自然や地域の歴史的文脈に応じて異なるからである。

ところが，その「内実」に即した学びを提供することは大変に困難である。例えば一般的に農業は，技術としての農業を圃場で実習として学び，地域課題としての農業を座学として学ぶ。この専門領域も時空間も分断された学びを、有機的に結び付けで学生に提供することが非常に困難だからである。そこで本授業では,「自然を糧にする営み（農・林・漁)」の現場に身体を没入し，実践者と協働するなかで地域課題の内実を「知る」から「分かる」へ転換させる教育を目指した。

本授業は「自然を糧にする」をテーマに，外部講師らが講義内容を独自に展開し，村田は全体のコーディネートに徹した。新型コロナ禍での安全確保のために，それぞれの活動への参加学生の人数制限を行った。そのため，学生らは全ての活動には参加せず，1 人当たり 3～4 回程度の参加となった。以下が本授業の概要と講師一覧である。

【林業】
・鳥取県智頭町：赤堀農林代表　赤堀宗範
・鳥取県智頭町：(株）Try’s 代表　橋本登志郎
・鳥取県智頭町：(株）小谷林業　小谷洋太
【漁業】
・鳥取県青谷町：鳥取県漁協夏泊支所
【農業】
・鳥取県智頭町：森のうまごや代表　岩田和明

以下が，地域との実学教育のなかで生まれた「地域学」の成果である。

*鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース
**鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース・1 回生

## Ⅱ．学びの記録

### 1.「生きる＝学習」生涯学習とは何か

池田幹太

#### 1)フィールドワーク以前の私

私の将来の目標は教職に就くことである。学校で働いて生徒に社会科を教えたいという目標があった。小学校・中学校・高校と多くの先生と出会ってきたが，授業が楽しくて親しみやすい先生に共通していたのは，経験談が豊富なことであった。それに比べ私は幼少期から病弱で，体調不良が続くことが多く，入院することもあった。出身地も岡山市内の東部で，比較的山や田んぼの多い地域であるが，雑草や動物にはアレルギーを持ち，虫がとことん嫌いであるため，進んで外で遊ぼうとはしなかった。

写真 1:入院時（当時 6 歳）

高校はボランティアや社会活動を多く行っていたり，海外に姉妹校認定をしていたり，修学旅行も国内と海外の選択制であったりと，普段体験できないようなことに積極的に取り組む学校であった。しかし，私は体が強くなってからスポーツに打ち込むことの楽しさに気づいたこともあり，ボランティアよりも部活を優先していた。海外に行くチャンスも，知らない土地に足を踏み入れる恐怖に負け，行動してはこなかった。

鳥取大学の地域学部に進学した際は，他の大学にはない，地域にどんどん足を踏み入れるプログラムがあるため，これまで体験していないようなことに挑戦しようと心に決めていた。そして本ゼミに所属し，積極的にフィールドワークに参加することによって自分自身にとって新たな体験を得ていくことを目的に，智頭町の住民の方々と交流させていただいた。

#### 2)生きるためには学力よりも知恵が必要

私たちはゼミ活動の最初に稲刈りを，その１か月後に脱穀作業を岩田さん一家に体験させていただいた。岩田さんは関東で暮らしていたが各地方を転々とし，現在は鳥取県の智頭町に移住し５年ほど暮らしている。岩田さんは稲作を中心に野菜を育て，山を管理するなど自然に囲まれて暮らしていた。私の出身地も機械や農薬を利用した稲作が盛んだが，岩田さんの稲作はすべて手作業であった。機械を使えば 20 分で終わる稲刈りも，私たちと岩田さん一家の約 20 人で作業して半日かかった。脱穀作業も機械を使えば，稲刈りと同時に終わらせることができる。それでも岩田さんは刈り取った稲を一か月間ほどほしておき，足踏み脱穀機と唐箕を使って稲からお米の状態にした。やはり第一の感想としては「疲れた」，「なぜ機械は使わないのか」というものだった。土を耕す際も機械は使わず馬耕という方法を用いており，それも体験させていただいた。馬のふくのすけ君はとても落ち着いた雰囲気で岩田さんの指示にとても従順であったが，間近で見たふくのすけ君の後ろ姿の筋骨隆々さと，馬耕器具を引く力には圧倒された。馬耕器具は地面に埋まった木の根などを断ち切るために，大きな刃物が付いており，それを力の強く，人間の予想どおりに動いてくれる保証のない馬が引くので，子供たちには危険だなと心配していた。だが，岩田さんのお子さんたちは危険度を理解しつつ，家族の一員としてふくのすけ君と触れ合っていたように私は見た。

写真 2:馬耕作業、ふくのすけ君

これらの体験についての質問の際，岩田さんは「実際にもみ殻のついたままのお米を触った経験のある人は少ない」，「知ることが大事」という言葉をおっしゃった。私はこれまでに自らの手で農業に携わった経験はほとんどなかったため，非常に心に刺さる言葉であった。幼少期からこれらを経験していれば，目の前にあった自然を遊びや生活に利用し，無駄にしない生活に対して興味を持っていた可能性もあり，実際に行い楽しさに気づいていたのかもしれない。稲刈り・脱穀作業日には岩田さんと村田先生のお子さんたちも参加しており，彼らは寒い智頭の山間で走り回ったり，木に登ったり，草木を積んでみたり自然をおもちゃにして遊んでいた。

写真 3:脱穀した米を持ち笑顔のゼミ生 K さん

この姿を見て私

は，運動能力の発達を助長することや，自然との共生能力を向上させる効果が外遊びにはあるのではないかと考えた。焚火でマシュマロを焼くと美味しく食べられることも，サボテンを触ればとげが刺さり痛いことも，実際に焚火をして，実際にサボテンを触らなければわからないことである。この実体験から得る学びのことを「生涯学習」と私は過去に授業で習った。教室で座って授業されるものだけが学びではない，生活において新たな発見や，知恵を得ることはすべて学習なのだ。数学ができるから，英語が喋れるから生きていけるのではなく，食料の買い方，調理方法，食べ方を知っているから私たちは餓死することなく生きているが，岩田さん一家は食料の作り方を知っている。お金が無くなったり，買う食糧が無くなったりしてしまうと私たちはおなかがすいてしまうが，岩田さんにとって食べ物は自然と共生して作るものなのである。生きるためにはどんな学びが必要なのかということを，私は岩田さんとの交流で考えることができた。

**3) 山はリゾート地**

小谷洋太さんとの交流ではヒサカキの収穫とヒサカキ畑の整備を体験させていただいた。洋太さんは智頭町の山で林業を生業としている，さわやかでかっこいい方だ。

当初，私は山に登ると聞いて整備された山道や階段があり，休憩小屋や仮設トイレがところどころあるのだろうかと思っていた。だが実際は自治体や洋太さんが小型重機を用いてつくった急こう配で上下の起伏が激しく，右へ左へと徐々に登っていく道であった。この道は山の谷と尾根の土地の質を見極め，崩れないように工夫された「壊れない道」であり，最小限の幅に作られている。

登山の途中に洋太さんの作った道ではなく，獣道を登っていくことになった。樹木の隙間を抜けて行ったり，柔らかな地面を滑り降りたりするなど，まるで冒険やアスレチック遊具で遊んでいるかのような気持ちになり非常に楽しかった。私の地元では山のふもとの広場や公園で遊ぶことが多く，山奥にはほとんど足を踏み入れるようなことはしなかった。

山頂に近づき昼食をとった。傾斜のある道を登ることは日々スポーツに取り組んでいる私も，足腰に疲労を感じるものであった。寝転んでみると，天気が良く強い日差しを葉が程よい影をつくり，冷たい風も非常に心地よく感じた。昼食後にはヒサカキの生育を阻害するヒサカキ周辺の樹木を伐採する作業を行った。ツタや飛び出ているヒサカキなども切ったが，私は少し幹の太い木をのこぎりで裁断するのに無我夢中だった。

洋太さんが手を加える山は，木の生育のための伐採や植林に至るまで育ちやすい環境を保たれていた。山頂付近で見た対面する山はまだ人の手が入っていなかったのだが，生育状況が不揃いであり林床が暗くなっているのだという。実際に木を切る以前は，「伐採」「裁断」と聞くと自然保護にとっては良いイメージは沸かなかった。だが説明を受けて実際に木を切っていると，質の良い木の生育は商品価値が高まることに加え，木自体の長期的生存を手助けすることになるのだと学ぶことができた。

写真 4:木の裁断に夢中な私

私たちが収穫したヒサカキは鳥取県内の葬儀場で使われたのだが，洋太さん曰く海外での需要もあるのだと聞いて驚いた。国内外問わず需要があり，自然豊かな山を多く持つ鳥取において知名度の向上やお金になる産業として活躍できると考えられるが，生産者が少ないという問題がやはり大きい。洋太さんとの対談でも，「いまだ人は足りていない」，「後継者をつくるためには伝えていく活動が大切」と聞いた。私はこの言葉を聞いて家業を継ぐ人間や一部の地域の人間だけでなく，すべての人々が林業に興味を持ってもらう機会を得るべきだと考えた。

しかし私がこの体験で一番に感じたことは山の中を歩き，木を切ってみたり，土の上に寝転んでみたりすることがこれほど楽しく，気持ちの良いものであったのだと気づいたことだ。虫が嫌いで草にはアレルギーを持つ私が，このような感想を述べられるように変わるとは私自身が一番驚いた。

写真 5:獣道を登っていく私たち

**4)山はお金と歴史の宝庫**

私たちはラフティーというあだ名で智頭町の林業仲間に親しまれている，橋本さんのお仕事を拝見させていただいた。橋本さんは関東の大学で林業を学んできた移住者である。橋本さんは山主である小林さんの山を管理したり，木を木材として市場に出したりと，山守として働いている。小林さんが代々受け継いできた山は，数十年，数百年も前から先祖代々に管理されている。

私がその山を見てまず感じたことは，非常に木が真っすぐに生育しており，木と木の間隔が揃っていて美しいことだ。木をまっすぐ育てるには植林時の土台作りを丁寧にし，枝打ちを施して幹本体に十分に栄養を送り，林冠が葉で埋まらないように木と木の間隔をしっかりと開けて，林床まで光を届かせる必要がある。この整った区域は小林さんの祖母が道具や山道の整えられていない時代に，一人で何万本もの植林をして，そこから世代を受け継いで管理してきたものであった。現在は橋本さんや智頭町の林業家さんたちが，植林や管理作業を複数人で，進化した道具などを用いて行っている。しかし伐採した木は非常に重く，刃物を利用したり高所へ登ったりするので負担や危険の大きい作業である。

写真 6:一直線に立ち並ぶ樹木

また，橋本さんには整備の行き届いていない区域を紹介していただいた。手の行き届いていない木も立派に太く高く生育していたのだが，林冠にぎっしりと葉が詰まり光が差し込まず，林床が暗く枯れて腐った木が落ちていたり，枝が伸びて折れた木がひっかかっていたりと，整備された範囲とは大きく違った。橋本さんの扱っている木は，木材として市場に出されるものがほとんどだ。現代求められる建築材料としての木材は，直線を描き，固く木目のきれいなものだ。橋本さんはその需要に応えるために，木の手入れを行っているのだ。売れる木材を育てるための手入れは，木の生育環境を整えるはたらきも同時に担っていることに私は気が付いた。林業という職業は市場に木材を供給するする役割と，山の環境を良くする役割の，責任の重大な仕事だ。

その後に木材を小刀でスプーンにすることに挑戦した。私が挑んだ木材はスプーンの湾曲部に節があり，二時間をかけてもスプーンの見た目には程遠かった。ゼミ生皆で木を削っていた時に，私は木の一つ一つ木目や節の有無，硬さや色もすべてが異なることに気が付いた。木でできた製品を私たちは日ごろから使用しているが，同じ木のスプーンでも異なる土地の異なる木でできていて，決して同じものは存在していないという見えない情報に気が付けたことはうれしく感じた。

夕方，小林さんの所有する別の山へと移動し，120 年ほど生育している林を見せていただいた。そこは午前中に見た，真っすぐな木が揃って並ぶ林と比べて，幹の太さは非常に太く，切り株の年輪を見ても年輪数が多かった。また樹木間の距離は広くなっており，揃っていた林と比べて点在しているように生育していた。それは木が大きく生育すればするほど間隔が狭まると生育に支障が出てしまうため，伐採するのだ。橋本さんと小林さんの説明では「４世代，５世代ほど前の先祖が植えて手入れしてきた木を，私たちの代で切るということはとても責任がある」とあった。木を切ることはチェーンソーがあれば数時間で可能だ。だが木を切って売る段階まで育てるには何十年，何百年も必要なのだ。「間伐のためとはいえ，数百年生育した木の歴史を終わらせるのは涙が出そうだ。」この言葉に私は，木や自然を大切にすることだけに重点を置くのではなく，木の歴史を新たに始める責任を持つことも大切だと考えた。伐採した土地に植林をし，育てる責任は林業従事者だけでなく，私たち木を扱って生きる一人ひとりが意識すべきだと思った。この意識は，自分自身の行動が将来にどう責任を持つのかという教訓のようだと，橋本さんとの交流で私は感じ取った。

写真 7:120 年生の杉

**5)山に暮らす責任と恩恵**

赤堀さんは智頭町で林業をする家業を継いでいる，元気で楽しいことが好きな方だ。私たちは植林作業をメインに，お世話になった洋太さんや赤堀さんの仕事を手伝っているさおりさん，カルボさん

と，自分たちで薪を割ってピザを焼く体験をさせていただいた。植林に対してフィールドワーク以前は，少ない土地に苗を植えてあとは自然に任せるものだと考えていた。実際は，苗の根っこに有機物が入らないようにすることや，苗をまっすぐに，空気が入らないように土をしっかりと踏み固めるなどの注意点があり，自然の力にすべてを任せるわけではないのだと気づいた。これらの注意点をおろそかにしていると，木が成長過程で枯れてしまうことがあるという。私たちが植えた苗は成長して木材になるまで，少なくとも 40 年以上はかかる。それを伐採したり保全したりするのは私たちの次の世代が担っている。数百年も生育すれば，数世代先の人間がその木を扱うことになる。この時の壮大さにはとても驚かされたとともに，未来につなげることの責任感を強く感じさせてくれた。

写真 8:植林作業中

数時間で植えた苗は約 150 本ほどだ。十数人で作業しても一本一本手作業で植えたため，植林した面積としてはそれほど広くはない。では機械を用いてより効率的に植林できないかとも考えた。しかし伐採後の切り株のある場所や，苗同士の距離が近くなってしまうところは調整が必要であり，地中に岩や根があるかどうかは掘ってみないとわからない。山に機械を持ち入るにも山道の整備に木を切る必要がある。何より後世へと続く責任を感じるには，機械ではなく自らの手で植えていくことが大切なのだ。

昼食後に赤堀さんの家の中でお話しさせていただいた。赤堀さんの家は築 90 年ほどたつ，かやぶき屋根の家であった。縁側のある古風で洒落た雰囲気は，壁や床の木目を生かしたデザインであるからだろう。玄関や室内の家具も木材が多く，私は柔らかであたたかい気持ちになった。山から持ち帰った木を薪にして燃料に使い，水は山から引いてきた天然の水をふんだんに使う。地形を利用した野菜の貯蔵庫や，建物・家具も木でつくる。都市部では不便と思われる生活も，実際に体験すれば，豊かで魅力的な生活であると理解することができるのだ。自分の価値観でものは判断してはならず，相手の価値観を理解することが大切だが，相手の価値観を理解することは難しい。だからこそ実際に現場に行き，体験することで，自分の価値観を見直し，分かり合い，新たな発見があるのだと私は学ぶことができた。

写真 9:からぶき屋根の家

**6)変わった私，変えさせる私**

これらのフィールドワークを経験して，私の教職に就くという目標に変化が生じた。以前は教員として学校社会科を教えたいという目標であったが，生徒に学校では教えられない，知らない世界を体験させたいという目標に更新された。私自身，フィールドワークを通じて，知らない土地や人の生活に足を踏み入れることで，自分自身の価値観が変化した。農林業に対して興味と楽しさを覚えたこと，自分の価値観は自分だけのものであると分かった。私が虫に対して過剰に反応してしまうことも，虫がいない空間に住んでいるためであった。また，この新たな発見や変化を生徒に体感させるためには，教員という学校の中で授業を行う人間である必要はないのだと気が付いた。生徒にとって新たな発見や知識を与えてくれる人間は，職業や年齢関係なく「先生」であるのだと私は考察した。智頭町でのフィールドワークを受け入れてくださった方々は皆，私にとっての立派な教育者であると私は感じた。私は学校だけが学びの場ではないのだと，人間は生涯学習していくのだということを今回のフィールドワークを総じて

写真 10:説明を受けるゼミ生

写真 11:りくま君と一緒に唐箕を上から観察する私

強く感じた。自然に触れ，自然の偉大さを感じながら第一次産業の必要性を学んだ。皆で作業を行い同じ釜の飯を食べ，皆で時を過ごすことの楽しさ，子供たちの純な感受性，先人たちの知恵などはまさに地域社会に赴かねば知ることはできなかった。この経験から，私は学校という組織の中で，生徒に知らない世界を体験させて自分自身を変えられるような新たな教育を行いたい。

## 2. 魚と生きる

**今井駿太郎**

### 1)魚を獲りに行く

2021 年 10 月 14 日，私は鳥取県鳥取市青谷町にある夏泊漁港の定置網漁に参加させていただいた。私自身幼い頃から魚が好きで，今でも魚釣りにお金と時間をかなり注いでいる。また，父親が漁師をしていた時期もあり，魚と漁の知識は一般的な大学生のそれよりも多く備えていると思っている。したがって,漁に参加できることを純粋に楽しみにしていた。今回の漁は個人が出船するものではなく，夏泊の漁村の漁師が協力し合って一つの船を出し村の利益にする漁である。その日船に乗った漁師は 6 名で年齢層が高く，煙草を吸っている姿は武骨な雰囲気を醸していてとてもかっこいいなという話を友人としていた。しかし漁師の第一印象は寡黙な人たちだなといった感じで，話しかけようものなら怒られるのではないかさえ思った。

船は朝 6 時に出港した。船が港の防波堤から出た瞬間，船の揺れが大きくなる。思わず声を出してしまうほどだ。この日の波は定置網漁をするには高めで，途中で引き返す可能性すらあった。といっても波の高さは 2 メートルもない。この漁がデリケートであることの証拠だ。一式数千万円もする定置網を仕掛けており，破ってしまえば相当な手間と時間がかかる。船の側面は意外と低く，船の側面から定置網を手繰り寄せるための定置網漁に特化した船のようだ。だんだんと日が昇り始め，空，朝日，海，長尾鼻の地磯がマッチし非常に美しかった。1 時間くらいは移動するのかなと思っていたが，30 分もしないうちに定置網を浮かせておくフロートが見え始めた。思ったより岸に近く驚いた。確かに近くには一級地磯の長尾鼻があり，回遊魚が回遊してくる可能性は高いが，港が十分見える距離で行うとは思わなかった。細かく操船し定置網を繰る位置につけると，船にある道具と機械を使って少しずつ定置網を繰っていく。半分は人力で半分は機械の力といった感じだろう。どこからともなく海鳥がやってきた。棒で水面を叩くことで魚を奥へ追いやりながら定置網を寄せては後ろへ流し，定置網の袋になっている部分を小さくしていく。実際に私も定置網を手繰らせてもらったが，全員が定置網を繰るペースを合わせないといけないということが意外と難しい。自分がどれだけ引っ張ったか分かりにくかったためだろう。網繰りが終盤になると二人の漁師が船に付けていたボートを，定置網を挟んで船の反対側まで移動させて定置網を細かくコントロールしていく。追い詰められた魚が水面付近で動き回っている。だんだんと魚のシルエットが確認できるようになり，私は興奮を抑えることに必死になった。シルエットから魚種を予想し後で答え合わせをしようなど一人で考えていると，漁師の一人が生け簀に氷を入れ，魚を入れる準備を始めた。いよいよ魚を網で掬っていくようだ。定置網は思った以上に底までが深い。定置網の奥まで上げていくうちに船の上から見えていた魚はごく一部であることに気づかされた。どんどん見える魚が増えてくる。サゴシが網を飛び越えようとジャンプする。魚も危機を感じているのか懸命に逃げようと試みているようだった。定置網の底が水深 1 メートル程まで上がったところで魚を網で掬う作業に移行した。魚を掬うのは 1 つの巨大な網だ。大人が丸々入る大きさの網である。網の底は開閉できるようになっているので掬った魚を出すために網をひっくり返す必要がないようになっている。網は重すぎるので機械を使って動かす。その網裁きは豪快に見えて実は繊細だ。定置網に入った魚は一匹も逃さないと言わんばかりである。実際，魚が逃げて船上を跳ねまわるとすぐに漁師がやってきて生け簀の中に放り込んでいった。水しぶ

写真 12:定置網を手操る漁師

写真 13:網で魚を掬う漁師

きをあげながら大量の魚を掬っていく様子は無慈悲にさえ見えたが，それ以上に誰も真似できないようなスポーツのスーパープレイを見て興奮するような感覚になった。さっきまで定置網の中を自由に泳いでいた魚たちは個々にピチピチと生け簀の中でもがいている。網で掬われたアオリイカが生け簀の中で墨を吐き，生け簀の中はたちまち黒くなり魚は全て墨にまみれた。定置網の底を水上まで上げきり，すべての魚を獲ったことを確認してから完全に網をもとの状態に戻して帰港した。

港に戻るとすぐに水揚げと仕分けがはじまる。木でできた選別台を船の近くに用意し，そこに魚をぶちまけて種類やサイズごとに分けていく。仕分けと箱詰めの作業をさせてもらえることになった。仕分けの作業では魚の種類を知っている必要がある。一般的な魚種ばかりで知らない魚はほぼいなかったため容易に作業を進めることができた。魚種を列挙すると，アオリイカ，マアジ，サワラ（サゴシサイズがほとんど），カマス，ウスバハギ，サバ，カンパチ（アカビラサイズのみ），マダイが多く獲れ，スズキ，ヤガラ，シイラ（ペンペンサイズのみ），イシダイ，ヒラマサ，アイゴ，アカエイ，アオアジ，ダツ，フグの仲間が数匹ずつ混じった。似た見た目の魚はいなかったので，魚の名前を知らなくても見た目で判断してできる作業だった。

改めて獲れた魚を見てみると，いくつか特筆すべき特徴があった。まず，マアジが多くて大きいことである。岸からの釣りではほぼお目にかかれない尺オーバーが多くて驚いた。次に，ブリとヒラマサがほとんど入らなかったことである。岸近くまで寄ってくるはずの秋に，ほとんど入っていなかったことが不思議だった。さらに，群れる習性を持つヒラマサが一匹だけ入っていたことも不思議だった。潮流が速すぎて定置網が水面付近に浮いてしまったことが関係するのかもしれない。次に不思議に感じたのは，ウスバハギが多く入っていたことである。カワハギ類は底生生物を主に食べるので表層の定置網に入ることはないと思っていたからだ。

漁師の仕事を見ていてもいくつか気になる点があった。まず，魚の扱いが雑だということである。効率を重視してのことだと思うが，魚が傷つかない程度に投げ入れたり洗ったりしていた。それに倣って同じように扱ったが，かなり気が引けた。魚が傷ついて売り物にならなくなってしまうのではと思ったからだ。しかし，漁師は私と違って何十年も毎日のように魚に触れている。どの魚はどのように扱うと傷つくのかを熟知している。漁師に比べて素人の私から見れば雑かもしれないが，漁師は雑だと思っていないのかもしれない。漁師は魚を生き物として見るより，お金に変わるものとして見ているのかもしれないと思った。つまり，価値が落ちなければ効率を優先するということである。

すべての作業が終わると船頭さんが私たちを漁協の事務所に案内してくださり，獲れたての魚と金フグの煮つけを振舞ってくださった。金フグは市場に出回らないフグである。どちらも漁師にしか食べられない漁師飯だ。金フグは引き締まった身にしっかりと味がしみ込んでおり，金フグの旨みを引き出していて絶品だった。お酒を飲んだ漁師たちは好き勝手にいろいろな話をしてくださった。まとまった量の魚が獲れたこともあり上機嫌だった。しかし，仕事がうまくいったからといって昼間からお酒が飲める仕事はなかなか無いだろう。しかも年収は数千万円にもなるのだから驚きだ。もちろん安定した収入を得られる職業ではない。初期投資に数千万円かかるので借金スタートからという人が多いのも確かだ。また突然不漁になれば収入は減少する。いくら努力しても魚がいなければどうにもならないのだ。

**2)農業と林業から見た漁業の特徴**

写真 14:稲刈り

このゼミ活動で私は漁業だけではなく，農業と林業も体験させていただいた。農業では機械をなるべく使わないない農家にお邪魔し，鎌を使った手刈りの稲刈りを体験した。ひたすら刈っては縛る作業を繰り返した。農業は自分の土地に自分の育てたい作物に合わせて土をつくり植える。ここに農業と漁業の大きな違いがある。まず，漁業をする場所は自分の土地ではない。その代わりに漁業権が設定されている。これにより素人が勝手に網を張ったり貝類や海藻類を獲ったりすると違法になる。農地に勝手に入れば不法侵入になることと同じである。しかし，回遊する魚は誰の所有物ではないため，だれでも獲ったり釣ったりすることができる。次に，農地のように土地を耕したり植えたりすることはできない。陸で養殖を行えば同じようなことできるが，基本的な漁は海や川で天然の魚を獲ることだ。確かに，漁師が山を手入れして川から流れてくる栄養を増やそうとする試みもあるが一般的ではない。栽培漁業という方法もあるが，遺伝子汚染や生態系の偏

りにつながるという問題がある。話を戻すと，海の水は流動的であり魚は自由に動きまわるのだ。稲作をやろうとして稲の種が飛んできて育つまで待っていたら仕事にならない。加えて，農業で扱う植物は収穫物が一定の高さにある。ニンジンだったら地中20センチほど，稲穂だったら地上40センチほどに動かずじっとしている。しかし漁業で扱う魚は水中何十メートルという範囲を動くことができる。農業は平面的，漁業は立体的だと言えるのではないか。このような特徴を総合すると，農業から見た漁業は不確定な要素が多すぎるのである。広く立体的な海で水面から作業し，動き回る魚を効率よく獲らなければいけない。だが，不利な点だけではない。海は広く立体的であるからこそ個体の絶対数が計り知れない。もちろん獲りすぎて減少した魚の種類もあるが，すべてを獲り尽くすことは難しい。海が巨大であるからこそ成り立っているのが漁業であると考える。

林業では非榊の収穫や山の手入れや植栽などを体験した。また，山に入り尾根ごとに様子が変わる木々を見たり，管理の行き届いた美林とそうでないところを比べたりして山を仕事場にすることについて考えてみた。私が気づいた漁業と違う林業の特徴は出荷までの期間の長さにある。前述のとおり漁業は育てることをあまりしないので獲れたら獲れた分だけ市場に出す。しかし林業は市場に出せる木になるまでに何十年とかかる。自分の前の代やその前の代が植えたものを出荷するか，自分が植えたものが育つまで待つ必要がある。次に，農業とも共通しているのだが，林業は収穫できる最大量が決まっている。土地を広げない限り生えている木の本数は変わらないか減るかのどちらかだ。漁業では魚が急増することも急減することもあり，漁獲の最大量は未知数に近い。このような点で漁業はギャンブル性もあるのではないかとさえ思った。規制がかからない限り獲れたら獲れた分だけ出荷できるが，全く獲れない可能性もあるのだ。

写真 15：管理された美林

### 3）社会にとっての魚，私にとっての魚

魚はしばしば「資源」と形容される。つまり，人の生産活動に欠かせない必需品であるということである。よって社会にとって魚は今と未来にどれだけの量が安定して獲れるかが問題とされる。できれば安く，おいしい魚が手に入ることが理想である。しかし魚が有限な資源である以上，乱獲すれば姿を消す可能性がある。その一方で，鉱物資源とは異なり，魚は有限ではあるが回復が可能であるという特徴がある。つまり，資源崩壊を起こしていない限り，山のように人が手を加えなくとも獲らないことで回復可能な場合がある。以前から国際的に規制がかかっていた太平洋のクロマグロは最新の研究で資源の回復が認められたため，漁獲量の増加を認められた。また，個体数の増減自体が自然周期的なものであると主張する学者もいる。そのような不確実な性質を持った資源が魚なのだと言える。

写真 16：水揚げされた魚

前述のような社会の認識に比べて私の認識は少し異なる。もちろん私も安くておいしい魚を食べたいと思っているが，これ以外に形容する言葉に困るような魅力を魚に感じるのだ。それがおそらく退屈な時間の長い釣りを好きでいられる理由だと思う。魚釣りというもの自体は趣味と捉えられるが，生き物を獲ること自体は趣味というより動物としての生活の営みの一部と捉えられるだろう。食物に余裕のあるヒトであるからこそ食物を調達する作業を娯楽に変化させることができた。ただみんなが釣りを好きではないところに私の特徴的な感性がある。このような感性が生成された背景には私の生い立ちが関係していると思う。私の親は共働きで父はある大学で准教授をしており，幼少期は父の大学の研究室によく連れて行かれた。周りにはアルコール漬けの魚介類が所狭しと並べられ，使わなくなった遠心分離機や顕微鏡で遊んでいた。家には大きな水槽があり，金魚やメダカだけでなくレッドリストの飼育禁止にされるギリギリ手前のランクに指定された貴重な魚や貝を飼っていた。また，父の研究の手伝いのために海や川で魚などを採取させられた。小学生になってからは研究の手伝いをすることは減ったが，幼少期の生活が魚のいる生活を当たり前にさせたのだろう。そして親に言われなくても自分から魚を追い求めるようになり，私が幼い頃父に教えてもらった釣りというものにたどり着いたと考えられる。つまり，私にとっての魚は生活に必要な資源というだけではなく，私という人間を形成するアイデンティティの一部と

考えられる。

**4)生きていく糧**

私は基礎ゼミのフィールドワークをとおして今まで気づかなかった自分を発見することができた。他のメンバーの感じたことと比べてみることで自分の感性の特徴を知り，ほかの人と似ている所や全く異なる所を把握できた。しかし，まだ見つけられた自分の感性はごく一部であるだろうし一生見つけられずに終わる部分もあるだろう。ならばせっかく見つけることのできた自分を使ってやりたいことをしてみるべきではないか。没頭できる趣味としてだけでなく，時には研究対象になったり時には職業になったりすることもあり得る。とにかく使えるものを眠らせておく必要はない。お金では買えない幸せや充実をもたらすものとして自分の感性に正直に生きていきたいと考えた。

## 3. つなぐとは

**佐崎正宗**

**はじめに**

私の，今回のフィールドワークでの発見は，私が大切だと思うものを将来の世代につなぎたい、残したいと思ったことだ。この残す行為自体が，生きていく上で大切なことであるのだということも，今回私の発見であり，私が大切だと思うものだ。そしてその思いは,「つなぐ」ということを行うため，私の「つなぎたいもの」,「つなぐ方法」を見つけなくてはならないという問いに私を至らせた。実際に農業，林業，漁業の場を体験したことは，これまでの私の価値観を幾度も覆し，知識が更新された。本レポートでは，今回のフィールドワークのなかで更新された知識を書き記すことで，私が「つなぎたいもの」「つなぐ方法」という考えに至る過程を描いていきたい。

**1)岩田さん一家での農業体験**

11 月 13 日，私は鳥取県鳥取市智頭町の岩田さん一家が管理をしている田んぼで脱穀体験をした。江戸時代中期に初めて日本に伝来してきた，歴史の古い唐箕を用い風力を利用して穀物を精粒，くず粗，藁くず，塵に仕分ける作業を行った。手動で取っ手のついた幾枚もの羽を箱の中で回転させ風を起こし，箱の上から籾を大雑把に穂軸・小枝から外したもみを入れ，粒の大きいもの，比較的粒の小さいもの，その他に仕分ける作業を体験した。私は，唐箕を実際に見たこともなく,勿論使用したこともなかった。歴史の教科書の江戸時代の箇所に載っていた唐箕をまさか自分の手で使うことになろうとは夢にも思っていなかったため，実際に使用するときは少しわくわくした。

**2)「自発的な学び」と「受け身的な学び」の違い**

脱穀体験の日は，岩田さんご夫妻とお話をする機会もあった。私は岩田さんのお話に非常に共感した。その共感が生まれた理由は，基礎ゼミの私自身の体験と結び付いていたからであるように思う。それは，学ぶ姿勢の違いと記憶の残り方の関係についてのお話である。学ぶ姿勢には,「自ら学びに行く自発的な姿勢」と「人に教えてもらう受け身的な姿勢」の 2 通りがある。岩田さんは，その学び方の違いによって記憶の残り方が大きく違うのだと話された。私自身も，基礎ゼミの体験を通じて，2 つの学びの姿勢から得られる知識や記憶の残り方の違いを実感することがあった。

写真 17:使用した唐箕

これまで私が小・中学校，高等学校の授業で学んできた知識は,今,急激に抜け落ちてしまっている。唐箕による脱穀体験であれば，私は中・高等学校で唐箕を知る機会はあった。唐箕は江戸時代に日本に伝来し,脱穀に用いられた道具であるという知識だ。しかし，その知識はほとんど忘れかけており，今回名前を思い出すのにも幾分か時間を要した。また，唐箕の構造についても授業で教わった覚えはある。しかし，その授業の内容については，ほとんど思い出すことができなかった。

一方で,「自発的な姿勢」で学ぶ機会を得た今回の体験では，実際に自分で唐箕を用いるなかで，機械と遜色のない精度で，コメの粒が分別されていく事実を実感したのだ。この実感は，これまでの小・中学校，高等学校の授業では経験することはできなかった。この実感から，唐箕が江戸時代から重宝されてきた理由や，岩田さんの究極的な自然農法が唐箕という道具に支えられていることに気づくことができた。私は，唐箕は古い道具であり，機械化された新しい道具が普及した現代では使用する必要はないと考えていた。しかし，唐箕を実際に使う体験を通じて，唐箕と農業の関係をめぐる自分の知識が更新

された実感があった。私は，唐箕について知っていたつもりで，唐箕がどういったものなのか本当は分かっていなかったのではと感じたのだ。さらに，今回の体験で生まれた私の更新された知識や実感は，一生ものであるのではと感じさせるほど，私の記憶に色濃く刻まれたのだ。

### 3)想像も及びつかないこと

次に岩田さんがなぜ農薬や機械を用いて稲作をおこなわないのかについて記述する。岩田さんは鳥取県に来るまで神奈川県で会社員をしておられた。都市部では，自らが生きていくために必要なもののほとんどを自給することができなかったそうだ。そのため，都市部での岩田さんの暮らしは，自らが生きていくために必要なものを同等な価値を保存したお金を用いて揃えていたという。自らが生きていくために必要なもののほとんどを自給することができない環境で生活をすることに，どこか危機感を抱いていた岩田さんの不安が的中したのが 2011 年の東日本大震災であったという。想像通りに，生活に必要な物資の流通が滞り，自らが生きていくために必要なものは入手が困難になった。このような緊急時には,価値を保存していたはずのお金はただの紙切れ・鉄くずとなってしまった。実は，お金とはそれそのものに価値があるのではなく，モノ・サービスに交換可能であることに価値があるのである。この経験から岩田さんは，できるだけお金を必要としない暮らしを求め，稲作など様々なことを学んできたという。

私は，稲刈り体験で，なぜ農薬や機械を用いないのかという疑問を持つことが幾度かあった。というのも，1 反という広さの田んぼの稲刈りを 10 人強で行ったが，朝の 10 時前から始め，日が暮れる 17 時頃までかかってしまったからだ。もちろん不慣れな作業であったということもあるだろうが，1 日のうちの作業ができる時間のほとんどを要したのである。聞く話によると一般的な機械を使いこの面積の稲刈りを行った場合，20 分程度で作業を終了することができるそうだ。稲を刈る作業の他にも，稲を地面に立たせて簡単に干した後に，稲架掛けと呼ばれる稲を自然乾燥させる作業が 1 月も必要となる。それらの作業時間を含めて，機械であれば多く見積もっても一時間で全行程を終えることができる。しかし，手作業にこだわる岩田さんの背景には，前述のような私には到底想像の及ばない経験に基づいた考えがあったのである。私は，今回のフィールドワークで岩田さんの機械や農薬を用いない究極的な自然農法の凄まじさと，それを何年も実践してこられた岩田さんの意思に非常に驚いた。この思想は今後も引き継がれていくべきであり，継ぐ者がいなくなり無くなってしまうのは悲しいことだと感じた。しかし，同時に，体験を終えた今でも，私が，岩田さんが行う究極的な自然農法を私自身が引き継ごうという考えには至らなかったということにも気づいた。

### 4)つなぐとは ～知ろうとすること～

前述したとおり，私は，岩田さんが行う究極的な自然農法を継ぐ者がいなくなり無くなってしまうのは悲しいことだと感じた。しかしながら，体験を終えた今でも私自身が引き継ごうという考えには至らなかった。そこで，岩田さんが私たちを受け入れ，自然農法を体験させてくれたことの意味とは何なのかを考えなくてはならないという問いに至った。この問いの答えを岩田さんのお話の中に見つけることができた。それは,「知っておくこと自体が意味を持つ」という語りだ。私たちが岩田さんの自然農法とその背景にある思想を知ることで，私たちの中でその生き方は選択肢としてあり続けることがある。つまり，直接的に農業に従事し継ぐとは異なるもうひとつのつなぐ方法があることを学んだ。

私は，岩田さんが，岩田さんの行ってきた農法を継ぐ者がいなくなってしまうことに，あまり焦りを覚えておられないように思え，不思議に感じた。岩田さんご夫妻は，私たち学生に対して,「今後どこかでこのような生き方があると，いつかどこかで思い出してくれるとうれしい」,また子供たちの教育については,「そういえばお父さんお母さんはこんなことをしていたなと思い出してくれるとよい」とおっしゃられていた。つまり，岩田さんは，子供たちへ「つなぐ」方法として，自分たちの農業を見せる・一緒に行うということを選択していた。実際に，この「つなぐ」方法は岩田さん一家の日常の中に組み込まれている。だからこそ，岩田さんには焦りのようなものを感じられなかったのだろう。

### 5)林業体験

10 月 30・31 日，私は智頭町で林業を体験した。林業がどういったものなのかをあまり知らない私には新鮮な体験となった。私は橋本さんのお話の中でも，特に印象に残ったことがある。林業では管理する森の木をしかるべきタイミングで切り倒し市場に出す必要があるが，木はその市場に出せる大きさに育つまで 40～50 年ほどかかるという話だ。そのため，橋本さんがこれから植林を始めたとして，それ

が利益を上げ，橋本さんの懐にお金として入るまでには，少なく見積もっても 40～50 年はかかるということだ。つまり，林業をやりたいと思ったとき，40～50 年は少なくとも利益を上げる方法がないということだ。橋本さん自身も 90 年ほど前に画一的な植林が行われた林を山主の方から受け預かり，林業を営んでおられた。まずは，林業という仕事の時間の概念のスケールの大きさに大変驚くこととなった。

写真 18:90 年生の人工林

**6)つなぐとは ～恩送り～**

前述したとおり，林業という仕事の時間の概念のスケールは，とてつもなく大きいものであった。そのため，自分の利益として見込めない木・森を相手にした作業工程もあるのだという。森の木の状態によっては，利益を見込めないこともある。そのような場合は，木・森を育てていかなければならない。しかし，その育てる作業の工程は前述したとおり，40～50 年あるいはそれ以上を見積もらなければならない。橋本さんは 38 歳であり，その木を出荷できる状態にまで育てると最短でも 80 歳近くになってしまう。そうなれば，自らの手で木を切り倒し出荷することは困難である可能性が高く，直接的に自らの利益にすることは難しい。しかし，それでも自分の利益として見込めない木・森を相手に丁寧に仕事をされておられる姿を，私は不思議に感じた。橋本さんは，山主さんの奥様が 4 万本もの植栽を行った森を受け預かり林業を営んでおられる。橋本さんは先の代の人々が未来の世代のためを思い木・森を育てられてきたように，自らも未来の世代を想い木・森を育てていくのだとおっしゃられていた。橋本さんはこれを「恩送り」と表現されていた。私は，このお話を聞いて，林業の物理的にものを残す，直接的な「つなぐ」行為を知ることができた。

**7)体験しなければ分からないこと ～林業編～**

今回の林業体験から，私は，フィールドワークを行うことの意義や良さについて感じることができた。橋本さんが林業を営む山では，短期的な効率よりも長期的な効率を重視して，木の管理がなされていた。というのも，木は，一度にたくさん切り倒してしまうと連鎖的にそこらあたりの木がだめになってしまうそうだ。木を切り倒してできた空間が大きいと，森の中に侵入する風が強くなってしまう。すると，木が外回りからどんどん枯れていってしまうのだそうだ。そうなれば，地中の根もだめになり，地が緩み，土の保水力が下がってしまう。これらが連鎖し，森全体に影響していく。そのため，短期的な効率を求めて，一度に大量の木を切り倒してしまえば，森全体で連鎖的に木が枯れてしまう。得られるはずだった収益さえも得られなくなるのだ。つまり，長期的に見れば効率は悪くなるということだった。

実際に，一度に多くの木を切り倒した森を見せてもらった。お話の通り，痩せた，枯れた木が多く，これ以上の収益は多くの労力と長い年月を積まなければ得ることは難しいようにみえた。この森では短期的な効率を重視して出荷が行われたのだ。橋本さんのように，長期的な効率を重視する方もおられれば，そうではなく，短期的な効率を重視する方もおられる。この違いがあるように，同じ林業を行う方々でも，何を大切にされているのか違うということがある。しかし，私はこれまでに地域問題を考える際に，果たして何を大切にされているのかといったことを現地の人に聞いたことはあったのだろうか。当然であるが，地域問題が実際に起こっている土地もそれぞれに事情は異なっている。これまでその土地の人々が何を大切にしてこられたのかという，事業の主軸を為すものは，実際にその土地の人々に聞かなければ分からないことである。しかし，私は，それを行ったことが無いことに気づいた。私は，今回のフィールドワークを通じて，現地の人々に話を聞くこと，体験をすることでしか得ることのできないデータもあるのだと知ることができた。

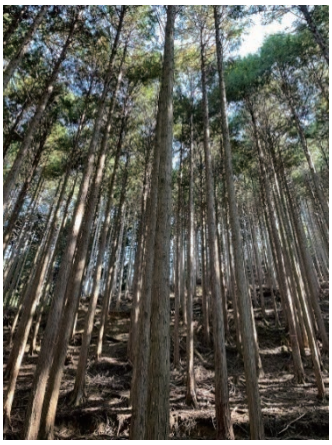

写真 19:山主さんが大切にしてこられた山

**8)植栽体験～つなぐということを実際に行って～**

私は，11 月 20 日，智頭町の赤堀さんの管理する森で植栽を体験した。その植栽を体験した森の木はどれもものすごく幹が太く，私の胴回りの長さを軽く上回るものばかりであった。それを見ながら山に

入ったせいもあり，植える木の苗の小ささ，細さにまずは驚いた。作業はいたってシンプルで，20cm 程地面を掘り，その掘った穴に根がきれいに収まるように入れ，土をかぶせる。かぶせた土を上から力強く踏み込み，しっかりと踏み固める。それで一工程であった。

前述したとおり木は出荷できるような大きさになるまで 40～50 年は少なく見積もっても必要である。したがって,私たちが植栽を行ったこの苗らは私が,少なくともおおよそ 60 歳ごろに市場に出され,人々に使われることになる。やはり，時間の概念のスケールが非常に大きく，その途方もなさを感じた。それと同時に，このような大きなスケールを持つ,「つなぐ」事業に関われたことをうれしく思い，また率直に素晴らしいことだとも思った。赤堀さんは，この植栽を経験し，知っていて欲しいと，ただ純粋にそう考え，私たちを受け入れてくださったとお話されていた。

写真 20:自らの手で植栽したスギの木の苗

**9)全体を通じて私が考え得たこと**

私は，岩田さんの農業，橋本さんの林業，赤堀さんの植栽を体験した。そして，これまでに記してきたように，それぞれが大切にされている「つなぐ」ということを感じることができた。このフィールドワークの中で，私が共通して感じ取ったことは，岩田さんも橋本さんも,赤堀さんも「つなぎたいもの」を持っていたということだ。その「つなぎたいもの」を残すためにおこなう「つなぐ」という行為の方法はさまざまであった。しかし,「つなぐ」行為を行うことが大切にされている事実に気づいた。岩田さんも，橋本さんも，赤堀さんも生き生きとしておられたが，それは「つなぎたいもの」を持っており,「つなぐ」ことを実践しておられたからではないか。

私の「つなぎたいもの」は何だろうか。私にとって大切なものとは何だろうか。私の「つなぐ方法」とはどんなものが良いだろうか。これを今後見つけていきたい。今回のフィールドワークでは，そのヒントを発見することができた。

岩田さんの「つなぎたいもの」は，岩田さんが実践してこられた究極的な自然農法と，その実践の背景にあるお金に頼らない生活であった。そのための「つなぐ方法」は，一緒に作業を行い，見てもらい，知ってもらうことで将来の選択肢のひとつとさせることであった。橋本さんが「つなぎたいもの」は，山主の方から受け預かった森であり,そのための「つなぐ方法」は，恩送りの精神で自らの損得を気にせず森を残すことであった。赤堀さんが「つなぎたいもの」は，林業という生業であり，そのための「つなぐ方法」は，学生らに植栽を体験する機会を持たせることであった。

私も，私が大切だと思うもの「つなぎたいもの」を持ち，それを私の「つなぐ方法」で残すということを大切にできる教師になりたい。そのように思う。そしてなによりも，今回のフィールドワークで得た学びこそが私の「つなぎたいもの」のひとつとなった。それは，見て，体験して，知っておくことで人生の選択肢のひとつとなるということ。その世界に行ってみて，体験しなければ分からないことがあるのだということ。お金とはそれそのものに価値があるのではなく，モノ・サービスに交換可能であることに価値があるのであり，特殊な状況下ではその価値も失われてしまうのだということ。自発的に学ぶ姿勢で物事に取り組めば，そこで得た学びによって自分の知識が更新され，知っていたつもりだったことを本当に知り，初めて分かることができるということ。以上に記した四つである。私は，この発見できた学びを「つなぐ方法」を模索することと今後しっかりと向き合っていこうと思う。

## 4.「知る」ということ

**磯田啓成**

**はじめに**

今回の基礎ゼミのフィールドワークは「挑戦」や「知る」ことに対する私の感情が大きく変化させた。その感情の変化は私の世界の見方も大きく変化させたと感じている。本稿では，これらの変化を実体験と合わせて書き記していきたい。

私は瀬戸内海の生口島といういわゆる田舎で育ってきた。海に囲まれた環境で育った私にとって，海は遊び場であり，ほかの受講生に比べれば自然と触れ合う経験や理解は十分であると考えていた。しかし，農業・漁業・林業に触れる今回のフィールドワークの体験を通じて，私の知っている自然は，ほんの一部でしかないことを知った。

**1)挑戦**

智頭に暮らす岩田さんのところで自然農法を体験

させていただいた。正直なところ，柑橘農家である私の祖父が手伝いや作業する祖父の姿を通して，私は農業のことを理解していると思っていた。違いがあるならば，ただ育てているものがお米なのか柑橘なのかという点だけだと考えていた。しかし実際に体験をしてみると，まったくの別物であった。

実際の体験では，多くの時間を稲刈りにも，脱穀にも費やした。太陽に照らされながら行った稲刈りは大きな体力を使うものであった。中学校から運動部に所属していた私であっても，少しずつの休憩なしでは作業を続けることができなかった。稲の刈る位置が私の足首程の高さであるため，かがんだままの作業が続いた。コツをつかむことができれば，力を使わずとも稲を刈ることができると教わったが，私はそのコツというものをつかむことができず，力いっぱい鎌を引き続けるしかなかった。かがんだまま力いっぱい鎌を引くという作業は，とてつもなく体力を削っていく。また脱穀の際に教科書でしか見たことがないような唐箕と足踏み脱穀機を使用したときは感動を覚えた。なぜならガソリンを使わないという考えを実現し続ける岩田さんの足身体で理解したように感じたからだ。機械化が進み便利になった世の中を体現する，都会で働いていた岩田さんは機械ではなく自然とともにある生活を選んだ。自然と共にある生活といっても，一切のガソリンを使用しない生活を選んだ。ガソリンを使わない農家は現在の日本には数人しかいないとお聞きした。これまでの自分を振り返ると，実例が少ないことに挑戦することにはとても不安を覚えてきたように感じる。それに自分の人生がかかっている選択や挑戦であればなおさらだ。それを実行した岩田さんはとてもすごいと感じた。また鳥取を選んだ理由が自分のためではなく，子どものためということも深く印象に残っている。

写真 21:稲刈りの様子

**2)「知る」**

この岩田さんの農業を知ることで，これまで分かり切ったものと理解してきた祖父の農業を，実は私は知らないのではないかと考えるようになってきた。現在の私は，祖父の農業がどんなものなのかがとても気になるように変化している。柑橘を収穫することしか手伝ってこなかった私は，その柑橘がどのようにしてつくられているのか，収穫した柑橘がこの後どうなってスーパーにたどり着くのかを知らない。柑橘を育て売り物となる過程に祖父のどんな思いが存在するのかもわからない。このことを地元に戻ったときに祖父に聞きながら作業を手伝わせてもらおうと強く思うようになった。一つのことを知れば，もう一つのことが知りたくなるというように，私の頭は変化してきたのだ。自分が知っていることが増えるという変化はとても心地よい。一つ知ったら，その逆やそれにかかわっていることを調べていくと自分の知っていることは確実に増えていくという考え方は，今までのわたしにはなかった。高校生までは一つの解に対して解き進めていくことこそが学びがあるという考え方であったが，今回の体験により大学生としての学び方を実感したと感じた。

そのように学び方が変わり，林業や漁業という知らない世界も知ることがとてもおもしろくなってきた。林業家の赤堀さんの，「林業を仕事として行っているのではなく，生活の一部として行っている」という考えには少し嫉妬を覚える部分もあった。他にも，薪割りも体験させていただいたのだが，私は薪を割るセンスというものが絶望的にないことが分かった。体全体を使い腰を下ろすようにして斧を振り下ろすのだが，この動作が私はとても苦手であるようだ。苦手なので，この作業を何度も繰り返すと体力との闘いとなってしまうのだ。気持ちよさそうに上手く薪を割っていく友人の姿を見て，悔しく思ったのでまた挑戦したいと思った。そのような体験を積み重ねるなかで，薪を割り，木を植え，伐採する林業は，私には向いてないのではと考えてしまう。しかし，仕事が生活の一部であるという事実には少しながら憧れを抱いてしまう。仕事と私生活との境目がない世界は私にはとても輝いて見えている。林業や自分について話す赤堀さんの笑顔はとても印象に残っている。その笑顔は，楽しいというものだけでなく，この仕事に誇りを持っているように私にはみえたからだ。

**3)感情の変化**

自分は岩田さんが機械を使わない農家であるとはじめて聞いたとき，正直なところ失礼とは思いつつも効率が悪いだけだと考えていた。しかし体験をさせていただく中で，効率以上のものがそこには存在していると感じた。例えば，脱穀の際に岩田さんの「知ろうとしないからほかのものが嫌いになる。知ろうとしないことがいけない」というお言葉を聞いた。この時，私ははっとさせられた。自分はその物

事を体験すらしていないのに，知った気になっているだけであるということを身をもって感じることができたからだ。いまでは，知らないものを自分が知った気になっているだけで全面的否定することは罪であるとさえ感じるようになった。

今回フィールドワークをさせていただく中で，私の中の感情が大きく変わっていくことを感じることができた。私はもともと新しいことに挑戦をすることがあまり得意ではなく，未知＝恐怖のように感じていた。しかし体験をさせていただく中で，未知というものは面白いものであると感じるように変化した。未知を知ることで私の中の知の世界を広げることができる。こんなに楽しいことはないのではないのだろうか。未知であるものは私たちの身の回りに腐るほど多く存在しているのではないか。例えばあなたのすぐそばにいる人の事をあなたはどれくらい知っているのだろうか。あなたが食べたご飯はどんな経路があり食卓へ届いているのだろうか。鳥取は本当になにもないのか。などといくらでも思いつく。また，教科書や本の中だけでの「知る」ということと，実際に体験してみての「知る」ということには違いがあると感じた。これからもどんどんと未知の世界へととびこんでいきたい。

## 5.「知っている」から「分かった」へ

**五嶋諒士**

**はじめに**

今年も昨年から流行している新型コロナウイルス感染症の影響が未だ終息する兆しが見えてこない。その様な状況下で企業では在宅勤務，学校ではオンライン授業が急速に進んできた。私はこの急速なデジタルトランスフォーメーションの進展社会に何か効率化する事が正しい事であり，その為に機械化が進み，AI 等の人工知能の発展している。その様な社会の中で生きている私が農業や林業といった文明の利器から離れ，周りの山や田圃等の自然と共存している方々から経験させていただいた多くの事を基に今後の社会を生きていく中で必要になると考えた事を書き記していく。

**1)機械の無い世界**

**1-1)人との繋がり**

2021 年 10 月の中旬に手刈りでの稲刈りを智頭町で農業をされておられる岩田さん一家の田圃で体験させて頂いた。岩田さんはエンジンを使った機械，例えばトラクターやコンバインを使わず，田植えから脱穀までのほとんどの仕事を人力で行っておられる農家さんであった。また，肥料も化学肥料や農薬を一切使わずに稲を育てておられた。私の実家には田圃があり，稲などを育てていたので岩田さんの家の田圃に入る前に，稲刈り前の田圃がどの様な状態なのかは何となく理解しているつもりであった。しかし，実際に岩田さんの家の田圃に入った瞬間，それまで予想していた田圃の状況とは明らかに違っていた。というのも，田圃には稲や雑穀以外にも地面から多くの植物が生えていたのである。私の実家は狭い土地に多くのお金を費やして良い品質の作物を育てる典型的な慣行農法で稲が育てられている。その様な農法は多くの人口肥料や防虫剤や除草剤を田圃にまいて，イネが育ちやすいように管理された田圃であり，田圃の泥はむき出しで雑穀を除いた稲以外の植物はほとんど生えていないのである。その様な田圃ばかりを見て来た私にとって岩田さんの田圃は色々な植物が競争しあいながら生きている未知の田圃であり，その光景は非常にインパクトが有った。それと同時に農薬や化学肥料を使用した田圃と使用していない田圃の違いが良く分かった。いざ岩田さんの田圃のイネを刈り取っていくと実家の田圃のイネとは違い，イネの一株一株が刈り取り辛く感じた。その一つの理由として岩田さんの田圃のイネは一株一株がしっかりと育ち丈夫な株だからという事が分かった。この様に丈夫に育った環境として上記の化学肥料や農薬を使わない農法が要因になっているのではないかと考え，改めて自然農法と慣行農法の違いが分かった。

野良仕事に体力が要る事は子供の頃から何となく親の田圃帰りの疲れ具合を見てきて何となく知っており，私自身も田圃仕事が終わった後は何も出来なく無くなるほど疲労する事は身をもって体験してきた。しかし，それは人力で行う稲刈りと比べると足元にも及ばない程である事を岩田さんの田圃で分かった。イネの根本を切れるまでしゃがみ，そしてイネを刈り取る。ある程度刈り取ったイネが集まるとそのイネを結んで地面に立てる。その単純な動作の繰り返しを行う。この一見すると楽そうな動きを刈り終えるまで永遠に続ける事は，機械に刈り取らせて機械が入れない場所だけ手刈りしてきた私にとって非常に重労働であった。また，手刈りをする中で高校の頃に日本史で習った「結い」が如何に重要であったかを身をもって体験して分かった。それと同時に岩田さん一家ですべての田圃を手刈りしておられる事に非常に驚かされた。

**1-2)好きだから続けられる事**

2021 年 11 月中旬に同年 10 月にもお世話になった岩田さんの田圃で手刈りして約 1 カ月程度干したもち米を足踏み脱穀機で脱穀をし，唐箕で選別する作業を午前に行った。午後は参加した学生を 2 組に分けて前後半制で脱穀・選別と馬耕を体験させていただいた。

それまで博物館や資料館でしか見た事が無かった脱穀機や唐箕を初めて使う機会であったが，その機械がどの様に動いてイネがどうやって籾になるのかはある程度知っていた。しかし，実際にそれらの機械を使ってみると脱穀機を動かすコツや唐箕の仕組み等多くの事が分かった。脱穀機は筒状の木材に何本も歯が取り付けられており，足踏み用の板を踏み歯の付いた部分を回し脱穀する。最初の説明の際に岩田さんにデモンストレーションをしていただいたが，その時に岩田さんは非常に滑らかな動きで次々と脱穀していた。そしていざ私たちが脱穀に挑戦しようとすると全く上手くいかない。岩田さんは一人で足踏みの板を踏み，脱穀しておられたが私にはそれが出来なかった。また，脱穀をする際にイネを歯のある部分に当てて脱穀するのだが，当てる際に歯にイネが持っていかれ回らなくなる。正直にそこまで難しそうに見えなかった脱穀作業が意外に上手くいかず私は面を食らった。そしてある程度時間が経ち脱穀が出来るようになっても最後まで一人で脱穀出来るようにはならなかった。脱穀された稲は籾と藁にわかれ，籾は振るいや唐箕にかけて選別され，藁は縛ってまとめられた。唐箕をかける前に網で振るいにかけて籾とその他に分けられその後，籾は唐箕にかけられる事になる。唐箕は江戸の頃から全国で使われていた昔の農機具でもかなり歴史のある農機具である。その様な古い器具でも籾を軽いものと重たいものに選別出来る事を唐箕が動いているところを見て，風という何処にでも存在する力で籾を選別している事を知った。そこで，人力ではあるが自然にもある力を使っているところに昔の器具の有能さが分かった。

午後からの馬耕では元耕作放棄地を開墾する為に馬を使って根切りの作業を行った。今回の馬耕で使っていた道産子が非常に大人しく，馬耕の最中に糞をしたり草を食べたりしていたが，岩田さんの合図にしっかり反応していた。私は物分かりが良い動物とは聞いた事があったが，ここまで賢い動物である事は初めて知った。また，馬耕をしている土地でつる鍬を使った人力での開墾も体験させていただいた。つる鍬を持ち振りかぶって地面に下して耕す。その時に地面につる鍬が入った時の感覚や大きな根っこを掘り起こした時の爽快感が私にとって非常に楽しく我を忘れてしまう程に熱中していた。

脱穀を行った日のお昼ご飯を摂った後に岩田さんと何故鳥取に来たのか，自然農法にこだわる理由についてお話をさせていただいたが，ここまで無農薬や化学肥料を使用せず人の力を主に使って田圃をしている事がどれだけ厳しく，苦労の必要な事であったかを手刈り・脱穀・選別・馬耕を通して分かった。しかし，その様な苦労をしてでも岩田さんがこの農法を続けられるほど好きである事が分かり，好きな事を続ける事がどのような事なのかが分かった。

### 2)モノの考え方

#### 2-1)林業における畑

2021 年 10 月 24 日に智頭の山で花や植物を取って売られている小谷さんのもとでヒサカキの収穫と枝打ち体験をさせていただいた。あまり林業には関わった事が無く，今まで山に入る時は登る時だった私にとってこの体験は新しい発見ばかりであった。まず，山に入って進んでいくとある所を過ぎると徐々に植生が変わり，杉やヒノキといった針葉樹林からヒサカキ等の広葉樹林に変化していった。そして小谷さんが「ここがヒサカキの畑」と言われた場所に来た時に私は非常に違和感を覚えた。私が考えていた「ヒサカキの畑」はミカン畑の様な一面にミカンの木が植わっているように，ヒサカキが植わっていると想像していた。しかし，実際はヒサカキだけではなく松等の違う種類も多く植えられていた。そこにはヒサカキ以外にも松等の色々な種類の樹木が生えていたのである。何故ヒサカキ以外の樹木も切られずに生えているのかは枝打ちの作業の際に知った。枝打ちはヒサカキが育ちやすいように枯れた木を切ったり，つるを落としたりするのだが，その時にヒサカキが育ちやすいようにするために残す木もある事を知った。この「ヒサカキの畑」を見た事で今まで私の中に合った畑という概念が，育てたいモノだけを植える場所であった畑が育てたいモノを育ちやすくするために育てたいモノ以外も育てる場所へと変化した。

#### 2-2)林業の方法に善悪は無い

2021 年 10 月 30 日,31 日の二日間にわたって智頭で林業をしておられる橋本さんのもとで林業の中でも伐採について体験させていただいた。林業は木を切る仕事であると考えていた私は橋本さんの「山を持続的なものにする為」に今は木を切らないという

判断が大変興味深く，2 日目に訪れた大きな機械で木を大量に切っている山を見て，林業も林業をしておられる方の考え方によって山の景色等が変わってくる事が分かった。これは決して林業だけではなく，今，世界中で問題視されている地球温暖化への対策や SDGs の取り組みにも言えることだが，ある視点から見ると非常に良い事のように見える事でも、別の視点で見ると必ずしも良いとは言えないこともありうると橋本さんの林業を体験して分かった。

### 2-3)家業としての林業

2021 年 11 月 20 日に最後の林業の体験として智頭で林業をされておらえる赤堀さんのもとで植林をさせていただいた。田植えや畑で植物を育てた事が有ったので何となく植樹については知っていたが，木の枝などが入らないようにするなど意外にも植物の様に繊細な部分が有る事を知った。その後，赤堀さんのお宅にお邪魔をさせていただき，まき割り体験をさせていただいた。まき割りをする事が人生初めてだった為，始めは斧を振り下ろすのが非常に怖かった。しかし，慣れていくにつれて恐怖心は無くなり，木の何処に斧を下せば割れるのか，節のある木をどうすれば割れるかを考えて薪を割っていると楽しくなり，薪が綺麗に割れた時は岩田さんの田圃で体験させていただいたつる鍬で田圃を起こしていく時に感じた爽快感にも近いものを感じ，お昼休憩の間最後までまき割りをしていた。

その後赤堀さんとのお話で赤堀さんの家は代々林業をされており，親からも「林業を継ぐ」事を子供の頃からよく言われていたと仰っていた。私の実家も農家であり田圃も有る為，いつかは農業をやらなければならないと言われている。その境遇の中で赤堀さんが仰っていた「いつか戻って家業を継ぐだろう」という漠然とした考えは私も有るので今のうちに色々な事を経験しておきたいと赤堀さんのお話を聞いて感じた。

### 3.「知っている」から「分かった」へ

これまで農業や林業を通して多くのことを体験させていただいた。その体験の中で，今まで生きてきて，学校で習った事や親から聞いた事，本や新聞等メディアを通して知った事が登場する事が多くあった。しかし，農薬や化学肥料を使っていない田圃の状況やイネがどうやって籾になっていくのか等「知っている」という知識は字面だけ覚えている事が非常に多い事を痛感した。また，それと同時に「分かった」という状況は「知っている」事を自分が見て聞いて触れて体験した事でしか得られない事も分かった。このフィールドワークを通して得られた「知っている」から「分かった」への変化は今後大学で勉強していく際に，コロナで急激に進んだ授業のオンライン化では得られない，実際に本物に触れて，観て，時には体を動かしてみないと分からない学びを続けていきたい。

## 6.時間の使い方

**越宮太一**

### はじめに

私は，第一次産業を体験したいなどの何か明確な理由があって，本ゼミを選択したわけではない。ただ，友達の多くがこのゼミを希望していたという安直な理由で本ゼミを希望した。なので，第一次産業に特別に思いがあるわけでも，フィールドワークに関心があるわけでなかった。しかし，実際にフィールドワークを体験して，教科書では学べない時間の流れを体験することができた。

### 1)稲刈り

2021 年 10 月 10 日，昼間は夏の残暑が残りつつ，日が暮れると冬の寒さを感じた日に私は鳥取県の智頭町で農業を営んでいる岩田さん一家を訪ねた。私は農業などの第一次産業の経験がなく，どんな生活があるのかワクワクしていた。

朝の 7 時 45 分に起きて，7 時 55 分までに朝食を終わらせた。そして，8 時 15 分までにシャワーを浴び終え，8 時 20 分に家を出て，8 時 30 分に大学でみんなと合流し，約 40 分車に揺れながら目的地へと向かった。その道中で窓の外を眺めていたが，見渡す限り田んぼの景色に胸が高鳴るとともに，想像以上の人工物のなさに少しだけ不安を感じた。
流れの速い川沿いに車を止めて，荷物を担ぎ，緩やかな坂を上った。左右には木造の家と田んぼ。そして，前方には電信柱や電線などが一切介入していない山景に，私は自分の知らない世界に足を踏みいれたように感じ，少し慄き思わず立ち止まった。
数分坂を上ったら，岩田さん一家の田んぼに到着した。長靴へと履き替え，20 分ほどでテントを設置し，私の初めての農業体験が始まった。

### 2)体現する大変さ

私は気を緩めたら転んでしまう程の傾斜を通り，田んぼへと入った。まず初めに岩田さんは稲から籾を取り，渡してくれた。私たちが普段食べている白

いお米はこの中に包まれていると知ることができた。また，採れたてのお米を食べてみると，とても硬かったがほのかに甘みを感じることができた。そしてその後，実際に稲の刈り方を教えてもらい，刈った稲を二束にまとめ，藁での結び方を学ぶことができた。そして，結んだ稲束を立てて乾燥させるというサイクルを私たちは繰り返した。

快晴の中，腰を屈めて稲を刈っていくうちに，先ほどまではそこまで気にならなかったが，目線が変わり，雑草が生えていることに気づいた。私の知っている普通の田んぼは，土の栄養が雑草にとられないように農薬を利用して駆除を行い，雑草がほとんど生えていない。しかし，岩田さんの田んぼでは農薬を一切利用しない。それどころか，当たり前のように使われているコンバインなどの機械も利用していない。その理由は，農薬や機械から出る油が環境に悪影響を及ぼし，長年にわたって使用することによって土壌や水質が悪化して使えなくなるからとおっしゃっていた。私も環境に対する配慮は大切だと思っている。しかし，思っているだけで実際に何かをしているわけではない。思うことや口で言うことは簡単であるが，岩田さんのように環境を考え，行動している人はどれほどいるのだろうか。私も岩田さんのように，自分の考えを行動に移せる，そんな人になりたいと思った。

### 3)違和感

田んぼの八割ほど刈り終えたとき，岩田さんの合図で一旦稲刈りを中止し，昼食の時間となった。昼食では岩田さんのお米とみそ汁をいただき，デザートでブドウをいただいた。昼食を終えると，みんなで談笑することや子供たちと遊んで時間を過ごした。真昼の暑い時間をテントの下で過ごし，また岩田さんの合図で稲刈りが再開した。

午後からは残りの二割を刈り終え，乾燥してあった稲束を木に引っ掛けて干した。一つの田んぼの作業が完了した時，すでに日は落ちかけていた。少し休憩を挟んだ後，岩田さんの二つ目の田んぼへと移動し，作業を再開した。二つ目の田んぼを刈る頃には，体中が筋肉痛で痛かったが，午前中よりも遥かに速く行うことができた。二つ目の田んぼを終えた頃には，すっかり日は落ちて，辺りは暗闇に包まれていた。無事，稲刈りを終えて車内で振り返っている時，何か違和感を覚えた。しかし，その違和感の正体をその日に理解することはできなかった。

### 4)「追われる」生活と「待つ」生活

岩田さんの農業の体験を終えて，私は翌日にアルバイトをした。私は居酒屋のホールスタッフとして働いており，何分後までにドリンクを作らないといけない，何時までに店長に今日の売り上げを報告しなければいけないなど，常に時計を見ながら考えて動いている。この時，昨日の岩田さん一家では，時間を意識していないことに気がついた。

大学生である私は課題や勉強，家事，アルバイト，サークル，趣味の読書や映画鑑賞，友人たちとの遊び，叶わぬ恋などやりたいことを多く消化しようと，時間に「追われる」ように生活を送っている。何かをする際に時間を常に気にしているため，時々精神的に疲れてしまう時がある。一方で，岩田さん一家では生活の中に時計がなく，仕事を時間によって区切っていない。日差しが強い正午をテント下で過ごすといったように時間を「待つ」ように生活を送っていた。稲刈りはとても体力が必要であり，大変な作業であった。しかし，時間によって仕事を区切るのではないため，時間に追われることなく精神的に余裕をもって取り組むことができた。

### 5)学びの機会

私はとてもせっかちで，前日の夜に立てた予定通りに行動しないと気が済まないが，岩田さんの稲刈りを体験することによって，時間に対する考え方を増やすことができた。

岩田さんの稲刈りで体験した時計の針を常に気にしない生活は，とても心地がいいと気がつくことができた。「追われる」生活を送っていると，時間を無駄にしていないかどうかが気になり，行動も制限してしまう。

以前の私は，時間の浪費をしないように日々を送り，ボランティア活動なども時間の無駄だと判断して参加を一切してこなかった。しかし，本ゼミを体験して，私の日常とは異なった生活を体験することができ，岩田さんの環境の考え方や時間の価値観を学ぶことができた。時間が有意義かどうかで行動をおこすか判断してきたことによって，私は学びの機会を多く失ってきたと感じた。行動をする前から時間の無駄だと決めつけて，学びの機会を減らしてしまうのではなく，自由に時間を多く使える大学生のうちに，様々な体験をして経験を積んでいきたいと思う。

## 7. 自身の変化

井上瑛太郎

### はじめに

私は幼い時から外に出るのが好きで，虫取りや川遊びなどをすることが多かった。しかし，中学，高校になるにつれ外で遊ぶ機会は減り，気づけば外で遊んだり活動したりすることなどほとんどなくなっていた。大学生になれば何かしらボランティア活動やイベントに参加するだろうと，曖昧な考えを持ったまま大学生になった。しかし，実際は特に何かしたということはなく，入学してから半年経った頃，ゼミの活動があることを知った。私はどのゼミにするか迷うかなと考えていたが，村田ゼミを見た際に何かビビっと感じるものがあった。フィールドワークで沢山のことを経験できると知ったからだ。外で活動できる喜びが大きく，幼い時の懐かしい記憶が喜びと同時に蘇りとてもワクワクしていた。

### 1)新しい見方

#### 1-1)初めての経験

私は岩田さん一家にお世話になり稲作について教わった。初めての学内外での活動ということに加え，稲作などしたことがなかったため緊張していた。しかし，岩田さんが実際に稲を刈り取る姿を見ると，自分の中で好奇心が高まっているのが分かった。そして，いざ刈り始めると夢中で刈っていた。自分にとって稲刈りが初めての経験であったため，そう感じ手が止まらなかったのだろう。自分の中での稲刈りは機械を使い，パパっと終わらせてしまうものだと思っていた。だが，岩田さん一家は一つ一つ手刈りで行っていて驚きを隠せなかったのと同時に，凄すぎると心から感じた。また，稲刈りをしている際に,「これはこうして刈った方がいいよ」とアドバイスをしてくれる岩田さんの次男のとうご君の手際の良さを目の当たりにし，小学生に負けるかと自分の中で燃えてくるものがあり，頑張ろうとやる気を引き出してくれた。稲刈りを終えると，かつて見たことがない沢山の穂の光景が広がっていた。この稲をみんなで刈り取ったと思うとやりがいがあったと思えた。今までよりも一粒を作る大変さに加え，自分たちで刈った稲を実際に食べ，一粒一粒のありがたみを肌で感じることが出来た。

#### 1-2)充実した時間

1 か月が経ち，刈った稲を脱穀する作業を体験するために私たちは再び岩田さんのところへ伺った。脱穀も稲刈りと同様に，機械を使わず足踏み式脱穀機に一つ一つの穂を当て，丁寧にお米を取っていった。その後,集めたお米を唐箕を使い選別していく。この作業も稲刈りと同じくらい数が多いため気が遠くなる作業ではあったが，どの作業もやりがいがあり，楽しく作業を行うことが出来た。普段何気なく当たりまえかのようにお米を食べていたが，実際にやってみないと分からなかった，育てる大変さや脱穀を終えた後の達成感などたくさん感じることがあり，貴重な体験だったなと改めて感じた。

写真 22:脱穀の様子

#### 1-3)新たな気づき

岩田さん一家とゼミ生で昼食をとった際に岩田さんご夫婦にお話を伺う時間があった。その中で今でも忘れることのない強く印象に残った言葉がある。それは「知るということが大事」という言葉だ。なぜその言葉が強く印象に残っているのかというと，私は小さい時から田舎で育ったため，田舎で暮らすことが好きで都会で暮らすことは反対にあまり好まず住みたくないし興味すらなかったからだ。岩田さんは鳥取に来る前は神奈川に住み,働いておられた。実際に田舎と都会の生活を経験している岩田さんからすると，やはり，都会の生活に慣れていると田舎での暮らしは不便なのだろうなと考えていた。しかし,私の考えとは反対に「田舎の暮らしも好きかな」とおっしゃった。また，それと同時に「どちらかに偏るのはその生活を知らないからで知ろうとすることが大事」だとも話された。この考え方は今までの私にはなく，どちらか優劣をつけてしまっていた。私は都会で暮らす生活のことをどのようなものかですら知ろうともせず，決めつけで都会での暮らしだけは嫌だと思ってしまっていたなと感じ，お話が聞けて良かったなと心から思うことが出来た。他にも自分の畑のことだけを考えているのではなく畑と森はセットで循環しているため，森も守っていかないといけないとおっしゃっていて考え方が素敵だなと感じた。

### 2)イメージとは違った山

#### 2-1)自分にはとてもできない仕事

私はヒサカキの採集のために鳥取県の智頭にある山に訪れた。今まで山に入って作業したことがなかったためとても楽しみだった。山に着きそこで林業をしておられる小谷さんにお世話になった。山に

は作業道と呼ばれる道があった。作業道は単に道を作れば良いというものではなく土砂崩れが起きた際に被害を少なくするために道を太くしない工夫がされていた。その道を上りながら山を観察すると中腹辺りを境に景色が変わっていた。正直なところ，遠くから山を見るとどの木も同じように見え，どの緑も同じ緑色に見えたり,季節によっては紅葉が起き，赤色に見えるが細かい色の違いなど全然分からない。しかし，このように実際に山に入り観察すると生えている木や尾根が見えたり，同じ緑色でもよく見ると濃さの違いに気づくことができ面白かった。昼食を取り，ヒサカキを収穫する時が来た。私の想像ではヒサカキは手の届く程の高さの木に生え，淡々と切って収穫していくものだと思っていたが，実際は 3 メートル程木に登り収穫するのを知り，収穫している姿を見て驚かされた。収穫したヒサカキは葬儀場で納骨やお墓の施工に使われると聞き，自分たちが収穫したものがそのような大事な場に使われると考えると，人生の最後に立ち会えたような感覚で感慨深く感じた。

### 2-2)自分と橋本さんの考え方の違い

また別の日には林業家の橋本さんにお世話になった。山に生えている木は代々受け継がれてきたもので長いものでは何百年と前に植えられたものもあるとお聞きし，衝撃を受けた。また，山に入り先祖代々受け継いできた何十年も前に植えられ育った木が沢山あるのを目の当たりにすると，時代を感じ趣深かった。林業家は木を切りそれを市場に出し生計を立てている。木が生えていれば生えているほど沢山切ることができ，稼ぐことが出来る。私なら正直お金が欲しいという私情がわき，沢山の木を売るだろう。しかし，橋本さんは今まで代々受け継いできたものを今後も自分が次の世代に受け継がないといけない，という考えを持っているためむやみやたらに木を切らないとおっしゃっていた。心の中でそう思ったとしても私ならその考えを心の中に留め，お金の欲しさに行動に移せないだろう。橋本さんは自分と違い山と真摯に向き合っている気がした。

写真 23:時代を感じる木

### 2-3)次世代へ伝える

植林を体験するため私たちは赤堀さんにお世話になった。今までお世話になった方々の所で見た木はどれも大きく立派だったため，苗を見た際，本当にこんな小さな苗が大きくなるのか疑っていた。しかし，周りに生えている木はどれも苗から育ったものだと教わると苗の生命力を感じ，自分が植えた苗から育った木がどうなるのか楽しみだなというのと同時に早く見たいとそわそわしている自分がいた。赤堀さんと話す時間がありそこでも学ぶことがあった。正直，ゼミの活動を受け入れ面倒を見るのはいつも通り作業が進まず大変だと思う。しかし，赤堀さんは「林業で学ぶこともあると思うから若い世代に伝えていきたい」とおっしゃり，自分たちも学んだことを伝えていかないといけないなと身にしみた。橋本さんにお世話になった時にも述べたが，時間というものの大きさを林業では感じることができた。今までは時間についてそんなに深く考えたことがなかった分，今回の体験を通して時間の深さを学ぶことが出来た。

### 3)まとめ

このゼミは，自分にとって何もかも初めての出来事が多く,その時間そのものがとても貴重であった。また，私には地元のために何かしたいという漠然とした夢があった。ゼミを選ぶ以前までは，市役所に務めパソコンとにらめっこし，何か貢献するイメージだった。しかし，今回のフィールドワークを通して，山や森と向き合う仕事も地元に貢献することが出来るのではないかと，新しい視点から見ることが出来たのではないかと思う。さらに，以前は知らないことには手を出さない，知ろうとしない自分だった。そんな自分が新しいことにチャレンジすることもいいなと思い直すことが出来たのは自分からすると大きいことであった。また，自分なりにお世話になった方々の共通点を考えてみた。その結果，自分の利益のためだけに仕事をせず他のことにも配慮したり次世代のことを考えながら仕事をしているのではないかという考えに至った。ゼミで出会った方々の出会いに感謝するのと同時におっしゃったことを忘れず,これからは自分の夢と向き合っていきたい。

## 8. 智頭町における自然という存在

**淺原唯貴**

### はじめに

私は高校生の時，田舎を賑やかにして景観や伝統を持続させたいという漠然とした思いがあった。と

いうのも，私が高校生まで住んでいた家の近くに多くの店がシャッターを下した商店街があり，そのように一度廃れた場所がまた賑わっている姿を見たかったからだ。そのためには，とにかく地域の人口を増やす必要があり，第三次産業に重点を置いて観光客や移住者を増やしていき経済的に発展させようと考えていた。地域学部に進学したのはその手法を探るためであった。しかし，フィールドワークで出会った方々の姿を見ていく中で，自分が今まで考えていた地域活性化が，本当に地域にとって重要なことなのかと疑問に思えてきた。本稿では，私がこのゼミで智頭町に訪問し体験したことから感じたことをふまえて地域活性化について考える。

**1)自然に手を加えること**

最初に紹介するのは，自然農法でお米を育てている岩田さんだ。農薬を使わないことに加え，機械を使わず農作業を行っている。岩田さんのもとでは，稲刈り，足踏み脱穀機，唐箕，馬耕を体験した。

稲刈りでは，最初に説明を受けるときに岩田さんがあまりにも軽く刈っており，子供でもできると仰っていたので，そんなにも軽いのかと思ったが実際やってみると一息に刈り取ることは難しかった。そのため，一株にもぎっしりと稲が詰まっていることが分かり，まとまって強く育っていることが感じられた。私たちはおよそ 15 人で 5 時間ほどかけて一枚の田んぼを刈ったのだが，機械で行うと数十分もあれば終わるらしい。ただ，手刈りでないとその稲の強さは感じられないだろう。足踏み脱穀機を用いた脱穀では，正しく動かすためにタイミングよく踏み込む必要があり，籾を飛ばすために稲束を刃にかける際にはしっかり掴んでいないと稲束ごと引っ張られてしまうため，器用さとパワーの両方が必要だった。たくさんの籾が飛び出す光景は，やはり稲がまとまって強く育っていることを裏付けた。唐箕を使った籾と藁くずや籾殻の選別作業では，唐箕の仕組みを知ることができ，風で軽いもの飛ばすという昔の人の発想に感動した。これらの作業はいずれも自動化することができるが，手作業で行うことで自然に触れ，人間が自然の一部を借りて手を加えているということを実感できたと思う。自動化した場合，稲と接するところが見えず，体力の消費量も極端に減るので，同じように実感することが難しい

馬耕の作業では，耕作放棄地を家畜として飼育された馬に耕すための器具を引っ張ってもらい耕起していた。馬の力を用いて何周もしないと掘り起こせないこと，またスコップを使わせてもらった時に全体重をかけないと刺さらなかったことから耕作放棄地にはいかに根が堅く太く張られているかが感じられた。このことから，自然の一部を借りているという自覚をもって手入れを続けないと，農地は強い力で元の姿に戻り，糧を受けられなくなることが分かった。

また，岩田さんは，森林整備も行っている。山と田んぼは一見関わりが無いように思えるが，森林を整備し成長させることで，蓄えた養分や水分を農地へと供給しているようだ。そのように自然同士のつながりにも人間が手を加えることで，人間と自然が共存しやすい関係が保たれていると思う。

**2)自然と共存すること**

次に紹介するのは，林業家の小谷洋太さんだ。彼は華道家ということもあり森林整備の他に華道に用いる植物の採集を行っている。今回体験させてもらったのはヒサカキの剪定だ。その内容は，幹と枝のつなぎ目に体重をかけ，滑らないように注意しながら木を登っていき，まっすぐ伸びている枝を選んで切るというものだった。この日，洋太さんは一本の木から十本程度しか切り取っていなかった。彼が言うには，世代を超えて安定した供給を維持するためには枝を残しておく必要があるのだという。ヒサカキは葬儀などで祀る品として需要があり，私たちが切り取ったものも後日葬儀に使われたそうだ。

また，洋太さんのもとでは枝打ちという作業も体験させてもらった。生育の悪い枝を切り落とし成長を促すことによって，木材の品質を高める目的がある。実際に見てみると，明らかに腐食の進んだ枝があり，悪いものを取り除くという点で，手当てするのに似た感覚で作業をした。このように，木の枝を切るというのは，人間の利益を確保しつつ森林を守る行為だと知り，これが人間と自然が共存するということなのかと感じた。今まで森林は勝手に成長し，人間は木材を採取するために山に入ると考えていた私の視野の狭さが自覚できた。

**3)自然に寄り添うこと**

3 人目に紹介するのは，林業家の橋本さんだ。橋本さんの山では，主に間伐の大切さを学んだ。話によると森林を成長させるには，最初に一定間隔で木を植え，一本一本が大きくなると木を切って残った木がより大きく成長できるようにするのだそうだ。橋本さんが請け負う山主さんの山ではそれを 120 年繋いできており，近くで見た樹齢 80 年を超える木々はとにかく太く高く，圧倒されるばかりだった。間

伐の様子を見学させてもらった時には，どの木を切り倒すのかを一本一本見て触れて吟味してかなり時間をかけて選んでいた。チェーンソーで切り倒す際には，どの方向に倒せば他の木に当たらないも考慮していた。その様子は，まるで木に語りかけているかのようで，自然に寄り添っているのだと考えた。

私も自然に寄り添うために，切り倒した木を持ち上げることに挑戦させてもらったが，全く動かず，木が成長してきた歴史の重みを実際の重さとして感じることができた。チェーンソーで丸太を切ることも体験させてもらったが，一息には切れず，見た目以上に太く感じた。このフィールドワークで出会った林業家の人々は皆，次の世代に繋げることを考慮して仕事をしていたが，話を聞いている最中はそれが理解できなかった。しかし今では，その考えは自然に寄り添った結果生じるものなのだと思うことができる。

写真 24:筆者が切った木片

最後に紹介するのは，林業家の赤堀さんだ。ここでは，植林を体験させてもらった。苗木を見るのは初めてで，今まで見てきた大きな木が最初は自分の腰よりも低いということは意外だった。そんな小さな苗木を枯れさせないように育てるには，根を広げて植え，土をかぶせたあと有機物が入らないように踏み固める必要があるのだ。立派な木になるには 50 年ほどかかるため，この作業は当事者よりもその子孫に資源を残すことになる。これも自然に寄り添い，自分の利益だけではなく森林の持続可能性も考慮しているからこそできることだと考える。

#### 4) 田舎の中にある人間と自然の関係

上記の 3 種類の考察から，私は田舎に住む人々の自然に対する思いを感じ取ることができた。彼らは自然から恩恵を受けるだけではなく，その恩恵を絶やさないように自然の手入れを欠かさない。これは恩返しのようにも見え，どちらか一方的になってしまうと田舎は消滅してしまうと考えた。例えば，人間の力が強くなると資源が枯渇し，自然の力が強くなると農地が自然に侵食される。第一次産業に触れたことが無かった私からすると，田舎が紡いできたのが人と人との関係だけではないということが知れたのは大きな発見であった。私はこれからも地域活性化について研究していきたいと思う。その際，自然という存在を包括して考えることも忘れないようにしたい。そして，調査をする際は，個々人を対象にするのではなく，関係性を見つけそのうえで必要な対策を提案できるようにしたい。

## 9. 家族のかたち

**竹鼻智耶**

#### 1) 岩田さん一家

2021 年 10 月 10 日（土），11 月 13 日（土），私は鳥取県の智頭町へ稲刈りと脱穀を体験させてもらうため岩田さん一家を訪れた。そこで私は，稲の刈り方や稲の結び方などを学ばせて頂いた。もちろんすべて手作業ですることの大変さやお米の一粒一粒の大切さが身に染みて分かった。でもそれ以上に私はそこで暮らす家族のかたちというものを学ばせて頂いた。私は父に対して怖いという感覚があり，同じ空間にいるだけでとても気を使い，常に緊張して家族という居場所を過ごしてきた。なので，父と話すことや家族でなにか同じことなどしたことがなかった。そのため，岩田さん一家はどのような会話をするのかどのように過ごしているのかが全く予想がつかなかった。合計で二日間一緒に生活することによって，私は岩田さん一家に，自分の家族の姿とは違う家族のかたちとこれから私が親になった時の家族のかたちのあり方を学ばせていただいた。

#### 2) 自主性

田んぼに移動してからはじめに，お父さんの岩田和明さんに稲刈りについての説明をして頂いた。その説明をしていただいている間に率先して，長男のこうき君と次男のとうご君が作業に取り掛かっていた。この二人の自主的に動く姿を見て，なんでこの子たちは自分で考えて自分で行動を起こすことができるのだろうと思った。自分が作業に取り掛かったときに，近くにいたとうご君が「ここの列を僕がするからお兄ちゃんはここの横を進めていって」と言われた。その言葉をかけてもらったおかげで，自分が少し家族という場所に入れてもらえた気がして，作業がとてもしやすくなり，やる気がとても出た。そして，その作業をしている時に，

写真 25:こうき君とりくま君

この子たちのような自分に何ができるかを自分で考えて行動に起こす力が自分にはなかったことを振り返ることができた。こうき君やとうご君のおかげでただ言われたことをするのではなく自分で取り組むということの難しさと大切さを学ぶことができた。そして，言葉をかけるということで私がとうご君からもらったリラックスした感覚を周りの人にも与えられるということが分かった。

**3)コミュニケーション**

和明さんが用具の使い方を説明してくださっている間，何度かこうき君や長女のゆずきちゃんが和明さんに「～の説明もしといた方がいんじゃない？」や「～はこれでやった方がいいんじゃない～？」というのを言っている場面に出会った。自分自身が父に対して今まで提案したこともなく，このような経験をしたことがなかったので不思議な気持ちになったことを覚えている。子どもたちの言葉に対して和明さんは「確かにそれも必要だね」や「その方法もありだね」と優しく言葉を返していた。そして，その和明さんの子どもたちの意見を否定はしないという姿が見受けられ，このような穏やかな話し方ができるお父さんになりたいなと思った。このような否定しない姿が子どもたちの自分で考える力を伸ばしているのかなと思った。目の前で行われた日常の親子の会話が子どもたちにとってリラックスした空間をつくりだしているなと感じた。このような空間を作り出すためには子どもたちの提案を快く受け入れ多くのコミュニケーションを取ることが必要だと分かった。

写真 26:りくま君と私

**4)温かみ**

岩田さん一家がなぜ田舎に移住してきたのか，ここでの生活で心掛けていることを聞く機会があった。その時に，和明さんとお母さんのえりかさんの話を聞いていてこれまでに震災などによっていろいろな決断をしてきたことを知った。鳥取に移住すると決断したのはこうき君の行きたいといった学校があったからだと言われていた。大きな決断の中に，子どもたちのことが考えられていて家族を大切に思う気持ちが感じられた。このような家族を思いあう気持ちが岩田さん一家の温かみを作り出している要因だと感じた。そして，その温かみによって子どもたちはのびのびとリラックスして家族という居場所にいられているのかなと考えた。

**5)家族のかたち**

私は，岩田さん一家と過ごして，子どもたちがリラックスしてのびのびと生活していること，和明さんとえりかさんの子どもたちに対しての思いを知ることで家族のかたちを学べた。自分自身の父とのかかわり方や家族という居場所の捉え方は，自分が経験してきたものとは違うものばかりだった。しかし，会話や作業をしていく中で違和感や緊張感でいっぱいだった場所が居心地の良い居場所に変わっていった。そして，和明さんやえりかさんのように子どものことを考え子どもにとって温かみのある家族の場所を作り出せるような親になりたいと思った。そして，これから家族に限らず自分の周りの環境を岩田さん一家のように温かみであふれる場所にしていきたいと思った。

## 10. 見える世界～心の変化～

**藤本雪香**

**1)これまでの私**

これまで私は，どちらかというと自然にあまり触れない生活を送ってきた。小さいころに，祖父の山でBBQや芋掘りをした程度である。中学校に入ってからは，部活や勉強が忙しくなり，祖父の山へ行くことはなくなった。海や山など，自然の景色を眺めるのは好きだが，きれいだなという感情以外は特に抱いたこともなかった。実家が第一次産業ではなかったので，木やお米を売り物として捉えたこともなかった。

大学生になり，一人暮らしやアルバイトをはじめた。これまではお小遣い制で，自分の通帳も持っていなかったため，お金使いは荒くはなかった。しかし親元から離れた解放感や自らの力で稼げるようになったことから，物欲は止まらず，欲しいものを買うために空いた時間はアルバイト漬けという生活を送るようになった。今思うと，お金を稼ぐためにアルバイト優先の生活になっていたかもしれない。ファミレスでのアルバイトもその仕事が好きで選んだわけではない。大学の講義も楽しいと思えず，淡々と過ぎていく日々だった。そんな私だったが，フィールドワークを通じて，見える世界が変わった。素敵な方々との出会いで，自分が本当にやりたいことが少しずつ見えてきたように感じる。では，どのように見える世界が変わったのか，本当にやりたいこ

とは何なのかを項目ごとに見ていこうと思う。

**2)価値観**

人によって個性があるように，自然の見方も人それぞれであった。好きな木を1人1本選んだ際には，どのような所に惹かれてその木を選んだのか，みんな見るポイントが違った。木全体の姿や,幹の太さ,木に生えたコケなど，木の見方が人によって異なるように，山の見方にも違いがあった。これまで木・森・林業に触れてこなかった私にとって山や木は，景観の一部でしかなかったのだ。

初めてフィードワークで山に行ったのは，榊の採取であった。そこでお世話になった洋太さんからは，自然を守ることを大切にしている印象を受けた。尾根や谷といった,ひとつひとつの山の特徴を考えて,災害の起こらないように作業道の整備を行っていた。「道を作ること＝山を壊すこと」というイメージを持っていたが，洋太さんが整備した作業道は山を壊したという悪い印象はなかった。作業道には，作った人がどれほど山のことを大切に思っているのかが表れているなと思った。また，木を切るのにも切り口が塞ぐような切り方をするなど，細かいところまで，木を大切にしているのが伝わってきた。

次の智頭林業で出会ったラフティーさんは，木を財産（お金）としてみているなと感じた。「この木は何円」といった見方は木で商売をしているからこその見方だなと思った。木材は身近なものであり需要が高いので,高価格で販売できると思っていたので,想像以上に安かったことには驚いた。林業を近くで体験した今だからこそ，この価格は労力や育てた期間に比例してないなと感じる。ゼミでの振り返りの際に，村田先生が私の感想には数字が多いことに気がついた。なぜ数字に着目した感想が多かったのか私なりに考えてみたところ，ラフティーさんが木を財産として見ているように,私は普段の生活の中で,時間や労働力をお金と結び付けて考えることが多いからだとわかった。もし私が林業をしていたら，ラフティーさんの木の見方に近くなるのかなと思う。

赤堀さんは，生活の一部として捉えていたという印象であった。赤堀さん自身も「仕事と生活の区別がない」とおっしゃっていたほど，山が生活に馴染んでいた。お風呂を沸かしたり,机を作ったりなど,生活していくうえで木はなくてはならないもの，そしてとても身近なものであった。オール電化だと,薪を割ったりする労力が必要なく，ボタン１つで済むので楽である。それにもかかわらず，赤堀さんは木を使用した生活をおくっている。居心地が良いからとおっしゃっていたが，便利さと居心地の良さを天秤にかけたときに居心地の良さを選ぶことは，私にはない感覚だ。赤堀さんには，薪を利用した生活を送ることに対して，不便や労力がかかるといった負のイメージよりも，木に囲まれた生活の方が居心地がよいというプラスの感情の方が大きいのだと感じた。

**3)お金は必要？**

今回お世話になった方々は，お金に貪欲ではない気がした。私は口癖のように「お金がない」「お金欲しい」とつぶやいている人間なので，彼らのお金に対する考えを聞いて，自分が情けなく感じた。私にとってお金とはかなり重要なものであり，暇な時間があればアルバイトをして稼ぎたい，お金は多くあるほど良い，という考えであった。

それに対して岩田さんは,「お金が必要のない暮らしを送りたい」とおっしゃっていた。税金などの払わないといけないお金を除き，自給自足の生活を送ることは，私から見ると大変そうだなと思うが，岩田さんは東日本大震災の経験から，物をお金で買う方が災害時などに困るという考えであった。私は大きな災害が発生し，お店から商品がなくなるという経験をしたことがないので，お金が役に立たなくなるという考え自体なかった。お金が使い物にならなくなった時，私みたいな考えの人間が困るのだろうなと思った。

ラフティーさんや岩田さんが前職の方が稼げていたにもかかわらず，その仕事を捨ててまで山の仕事に就いたのは，本当に山が好きではないとできないことだなと思う。私はアルバイト先を決める際に 1 番重視していことは時給だ。前職のファミレスも，自分のやりたかった仕事というよりも時給が良いからという理由で決めた。今の仕事や生活が合わないなと感じたときに，その生活を捨て自分にあった生活をおくるのは意外と勇気のいることだと思う。林業は安定した収入が得られないので，なおさらだ。しかし彼らには，収入が減ってまでも仕事を変えたことに対する後悔はないようだった。

彼らにとって,お金は必要なものかもしれないが,お金以上に自分のやりたいことや，楽しめること，好きという気持ちを大切にしているなと思った。

**4)子ども**

私は子どもが大好きで，フィールドワーク中も子どもと接することが多かった。ひたすら可愛くて癒しでしかなかったが，子どもたちと接する中で学ん

だことも多い。現代の子どもは，早いうちからゲーム機や携帯電話を触る子が多く，外で遊ぶ機会は少なくなっている。また，遊具は危険とみなされ，公園や学校から姿を消している。そのような社会の影響か，私自身も小さい子が木や山に登ったり，包丁や鋸鎌を持ったり，火遊びをしたりすることは，危ないからやらせたくないという思いがあった。

しかし，子どもたちが自然の中で自由にすることを止める大人は，フィールドワークで出会った方々の中にはいなかった。例えケガや痛い思いをしてしまっても，子どもたちにとってそれも一つの経験になるのである。大人が，子どもたちのやりたいという思いを尊重し，行動を制御していないからこそ，子どもたちは自主性が高く，それぞれ自我を持っているように感じた。また，自然に対する知識や知恵が豊富だったことに驚いた。特に，りくま君が，私には雑草にしか見えない小さな実が食べられるということを教えてくれた時にはかなり驚いた。あんなに小さい子が，植物を見分けることができるのは，自然が身近なものであるからこそなのだろうかと思った。学校では，火の起こし方や稲刈りの仕方は習わないが，こどもたちは当たり前のように行っていた。その姿を見て，私たち大学生は数学や英語はできても，生きていくための知恵はないことに気づかされた。自然に触れながら育った子と，都会で育った子とでは，身につく知識や遊びが異なっているなと感じた。これも見える世界，見てきた世界の違いの一つである。

### 5)好きなもの

なぜ彼らは,林業という仕事を選んだのだろうか。

彼らからは，山や畑，自然，仲間を本当に好きという気持ちが伝わってきた。2 でも少し触れたが，自然を相手にする仕事は好きではないとなかなか続けられないと思う。この仕事についたきっかけは，岩田さんのように震災を経験したこと，カルボさんのように単位を落としてしまったこと，半田さんのように今の仕事が続けられないと思ったことなど，人それぞれであったが，皆今の仕事や活動に誇りを持っていた。また，山が好きという気持ちは共通しているように感じた。

フィールドワーク中は，大人数での活動かつ，友達と会話しながらの作業だったのでとても楽しかった。しかしこれを一人でするとなると，植林や稲刈りは同じ作業の繰り返しで，面積も広く，飽きてしまいそうだ。カルボさんは「ツルの成長や動物のフンが落ちているなどの変化を見つけるのが楽しい」とおっしゃっていたが，これも山が好きだからこその発想だなと思った。半田さんは賞を受賞するほどの美容師としての腕まえがあったにも関わらず，この仕事を 10 年後も続けられないという自分の中の違和感から，林業の学校を経て林業の仕事についたとのことだった。安定した生活をとるか，自分の気持ちに素直になるのか，という選択の際に，自分のやりたいことを選ぶのには勇気のいることだと思う。半田さんのように，自分の気持ちを大切にできる選択を，これからはしていきたいと思った。

私はまだ将来の夢が見つかっていない。好きなこと，楽しいなと思えることはあるが，それを仕事にできるかはわからない。4 年後，自分がどのような仕事についているか想像もできないが，彼らのように好きなことを仕事にしたいなと思った。金銭的な豊かさのことばかりではなく，心の豊かさを大切にしていくことによって，物事の見方も変わっていくだろう。

### 6)田舎の魅力

将来都会か田舎のどちらに住みたいかと言われたら，以前の私だったら即都会と答えていただろう。お店や人にあふれた都会でのキラキラした生活は，憧れであった。しかし普段できない体験をしていくうちに，自然に囲まれた田舎での生活も良いなと思うようになった。都会のように大きなショッピングモールや遊園地はないが，田舎には田舎の輝きがあった。外でみんなで火を囲んで食べたご飯が美味しかったことや，軽トラの後ろに乗ったこと，キノコを見つけたことなど，些細なことでも楽しかった。田舎は虫も多く，遊ぶ所がないから住みたくないというのは，岩田さんのおっしゃっていたように，知らないから否定してしまっていただけなのかもしれない。実際に，智頭で様々な体験をして，田舎の魅力がわかった。

### 7)繋ぐ

フィールドワークで様々な場所へ行き，色んな方に出会ったが,すべての回で共通して感じたのが「繋ぐ」ということである。一言で「繋ぐ」と言っても，様々な意味での「繋ぐ」を感じた。

山を相手にする仕事は，物事を何十年，何百年という長いスパンで考えないといけない。今自分が手入れしている山や，植えた木は，全てが自分の財産となって返ってくるわけではない。もし今ある木をすべて伐採して売ると，かなりのお金が入るが，フィールドワークで出会った方々は誰一人としてその

ようなことはしていなかった。必要な分だけ伐採し，次の世代へと残していた。「恩送り」という言葉があったが，彼らの行動はこの言葉で表されているなと思う。このように「財産を繋ぐ」というのが１つ目の意味である。

２つ目は，「方法を繋ぐ」という意味である。岩田さんが,「子どもたちは手伝わずに側で遊んでいるだけでも良い。遊びながらでも少しは作業を見ている」とおっしゃっていた。赤堀さんは，時間をとってまでゼミ生を受け入れるのは，活動や山について知ってもらいたいからとおっしゃっていた。伝える方法は様々だが，誰かに今の暮らしや活動を繋いでいきたいという気持ちは同じであるように感じた。私は，火の起こし方やチェーンソーの使い方，薪のわり方を知らなかったが,教えてもらい知ることができた。さらに，知るだけではなく実践してできるようにもなった。まだうまくは出来ないが，私自身も方法を繋いでもらった１人だ。

３つ目の意味は「人々を繋ぐ」という意味だ。フィールドワークを通じて，私たちは新しい出会いをたくさんした。講師の方々はとてもフレンドリーで，初めて会ったにもかかわらず，緊張しなかった。ゼミ生を受け入れることは，準備をしたり，一日作業の時間がつぶれたりと，簡単なことではないかもしれないが，どの方も快く受け入れてくださった。そして，多くのことを体験させてくれた。これは２つ目の意味の所でも述べたが，彼らが守ってきたものや活動について若い世代につなげていきたいという思いがあるからこそのことだと思う。知識を伝えるだけなら学校で先生が行うこともできる。しかし，自ら地域に入って体験することによって知識だけではなく，講師の方の人柄なども知ることができた。他人と直接関わること，すなわち人々の繋がりが広がることは，その分新たな価値観を発見できるなと思った。ゼミでの活動はおわってしまったが，また一緒に活動したいと思えるような素敵な方々であったので,この出会いを無駄にはしたくないなと思う。

また，学生同士も仲良くなれた。ゼミが始まる前までは，全く男子と会話したことがなく，男子ばかりのメンバーは不安しかなかった。フィールドワークの活動の中で，同じ作業をみんなで行ったり，険しい山道を登ったりすることで仲良くなれたので良かった。

**8)これからの私**

お金と時間に常に追われ，自分のやりたいことを見失っていた生活はもうやめようと思った。私が地域学部に入ったのは，実際に地域にでて，自分自身で様々なことを感じたかったからだ。しかし実際に入ってみると座学ばかりで，正直地域学に興味がなくなりつつあった。村田ゼミで実際に地域に出てみることで，自分のやりたいことが少しずつ見えてきた。私は，カフェ巡りをすることが好きなので，いつか古民家カフェに携わりたいと思っている。古民家カフェは最近増えてきており，私の地元にもあった。そこで，何か個性のある古民家カフェをつくりたいと思った。例えば，自分でスプーンを作って，そのスプーンでカレーを食べたり，焚火でマシュマロが焼けるスペースを作るなど，体験とカフェを融合させた古民家カフェがあると面白いのではないだろうか。

また，彼らの姿を見て，これまでの自分がいかに小さな世界しか見ていなかったか，またどれほどつまらない生活をしていたのか，と反省をした。普段触れない生活を体験することは，新たな発見ばかりでワクワクした。知ると分かるは違うとおっしゃっていたが，その意味も理解することができた。例えば火おこしの際に，空気の通り道が必要なことや火は上の方が熱いことは知っていても，実際に火おこしをやってみないと，意外と火おこしは難しいということには気づかなかった。このような感覚をもっと多くの人にも体験してもらいたい。また，林業や農業，普段ふれることのない活動についても知ってもらいたいなと思った。

同級生にもすでに，地域に出て活動を行っている人はたくさんいる。自分が実際に体験すること，その地域の生活に密着することは，私の見える世界を広げてくれる。これまでは,行動できないでいたが，彼らの生き生きとした姿を見ると，小さなことからでもよいから行動を起こしてみようと思った。これからは自分の踏み込んだことのない領域に踏み込んで，知らなかったことを分かるに変えていきたい。

付記

本稿は，鳥取大学地域価値創造研究教育機構 地域連携推進室 令和３年度地域実践型教育活動(地域連携授業)の教育成果の一部である。